

用地調査等業務積算基準及び標準歩掛

第1章 適用範囲

この積算基準及び標準歩掛は、長野県建設部の所掌する公共事業に必要な土地等の取得等に伴う用地測量（土地調査を含む。以下同じ。）、建物・工作物（以下「建物等」という。）の調査、移転補償額の算定、土地等の取得等に係る業務（以下「用地調査等」という。）を別途定める用地調査等業務共通仕様書により委託に付する場合に適用するものとする。

第2章 業務範囲

用地調査等の業務範囲は、用地測量業務及び次に掲げる調査業務に区分するものとする。

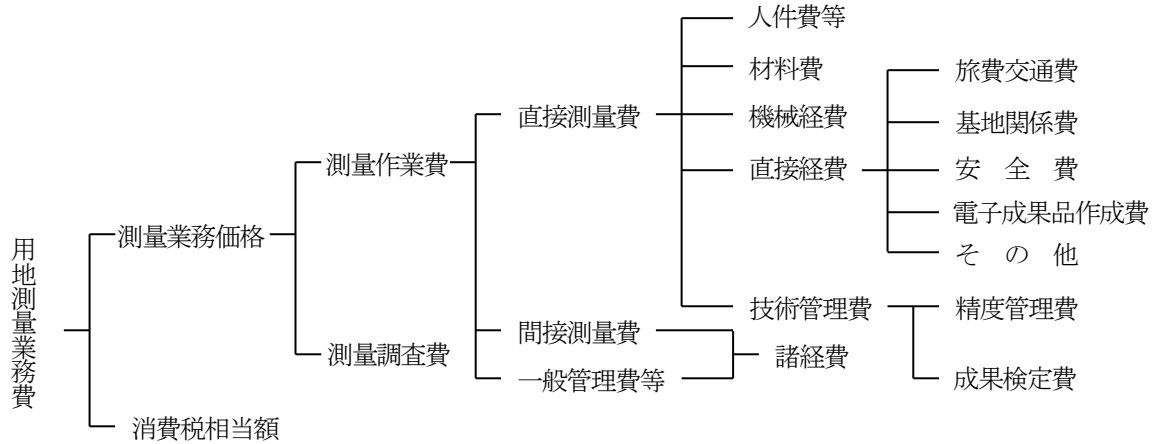
- 1 共通
- 2 建物等の調査
- 3 権利調査
- 4 営業その他の調査
- 5 予備調査
- 6 移転工法案の検討
- 7 再算定業務
- 8 補償説明
- 9 事業認定申請図書等の作成
- 10 消費税等調査
- 11 土地評価
- 12 地盤変動影響調査等

第3章 積算基準

3-1 用地測量業務

(用地測量業務費の構成)

1 用地測量業務費に係る業務費の構成は、次によるものとする。



(用地測量業務構成費目の内容)

2-1 測量業務価格

(1) 測量作業費

測量作業費は、一般的な測量作業に要する経費である。

① 直接測量費

直接測量費は、次の項目について計上する。

(7) 人件費等

A) 直接人件費

当該用地測量業務に従事する技術者の人件費で、その名称及び基準日額は次表のとおりとする。

(表-1) 基準日額

	基準日額	摘要
測量主任技師	別途通知	
測量技師		
測量技師補		
測量助手		
測量補助員		

B) 賃金

賃金は、当該用地測量業務に従事する普通作業員の人件費で、その基準日額は、別途通知の単価とする。

(4) 材料費

材料費は、当該用地測量業務を実施するのに要する材料の費用である。

その算定は、直接人件費に材料費率を乗ずる。

$$\text{材料費} = \text{直接人件費} \times \text{材料費率}$$

(ウ) 機械経費

機械経費は、当該用地測量業務に使用する機械に要する費用である。

その算定は、直接人件費に機械経費率を乗ずる。

$$\text{機械経費} = \text{直接人件費} \times \text{機械経費率}$$

(エ) 直接経費

A) 旅費交通費

旅費交通費は、用地測量業務を実施するのに要する交通、滞在、運搬等の費用であり、「県職員以外の者の旅費又は費用弁償に関する規則」に準じて積算するものとする。

なお、通勤及び滞在については、当該業務を行う資格のある者のうち、現地に最も近い本店等が所在する市役所等（以下「積算上の基地」という。）から現地までの片道距離が 30 キロメートルまでの場合は通勤、30 キロメートルを超える場合は滞在を標準とし、次のように算出するものとする。

a 滞在による場合

(i) 往復費

往復費とは、当該用地測量業務を行う技術員の作業現場までの往復（目的地に到着した日と、目的地を出発する日）に要する費用であり補正率の対象としない。

（算定方法）

$$\text{往復費} = (\text{基準日額} + \text{交通費}) \times \text{往復} + \text{滞在費 1 日分}$$

$$\text{交通費} = \text{運賃} + \text{特急料金（急行料金）}$$

片道 100 km 以上	特急料金
片道 50～ 100 km 未満	急行料金

(ii) 滞在費

滞在費は、当該用地測量業務を行う者が業務のために現地に滞在する費用である。

(iii) 運搬費

運搬費は、滞在の場合の現地内機械器具の運搬に要する費用及び宿泊地から現地までの人員輸送に要する費用であり、通勤による場合と同様各歩掛表の材料費及び機械経費に含まれているため、別途計上しないものとする。

b 通勤による場合

現地への往復は連絡車（ライトバン）によるものとするが、現地内機械器具運搬（各歩掛表で材料費及び機械経費として見込まれる。）に含まれているため、別途計上しないものとする。

B) 基地関係費

基地関係費は、用地測量業務を実施するための基地設置または使用に要する経費である。

C) 安全費

安全費は、測量作業における安全対策に要する費用である。

D) 電子成果品作成費

電子成果品作成費は、電子成果品作成に要する費用である。

E) その他

器材運搬、伐木補償、車借上料等に要する費用を計上する。

(4) 技術管理費

A) 精度管理費

精度管理費は、当該用地測量作業の精度を確保するために行う検測、精度管理表の作成及び機械器具の検定等の費用である。

B) 成果検定費

成果検定費は、測量成果の検定を行うための費用である。また、成果検定費は諸経費率算定の対象としない。

② 間接測量費

間接測量費は、動力用水光熱費、その他の費用で、直接測量費で積算された以外の費用及び登記記録調査（登記手数料は含まない）、図面トレース等の専門業に外注する場合に必要な間接的な経費、業務実績の登録等に要する費用である。

なお、間接測量費は、一般管理費等を合わせて、諸経費として計上する。

③ 一般管理費等

一般管理費等は、一般管理費及び付加利益よりなる。

(7) 一般管理費

一般管理費は、当該用地測量業務を実施する企業の経費であって、役員報酬、従業員給与手当、退職金、法定福利費、福利厚生費、事務用品費、通信交通費、動力用水光熱費、広告宣伝費、交際費、寄付金、地代家賃、減価償却費、租税公課、保険料、雑費等を含む。

(4) 付加利益

付加利益は、当該用地測量業務を実施する企業を継続的に運営するのに要する費用であって、法人税、地方税、株主配当金、内部留保金、支払利息及び割引料、支払保証料その他の営業外費用等を含む。

(2) 測量調査費

測量調査費は、宇宙技術を用いた測量等の難度の高い測量業務について行う調査・計画及び測量データを用いた解析等高度な技術力を要する業務を実施する費用である。

(3) 消費税相当額

消費税相当額は、消費税及び地方消費税相当分とする。

2-2 用地測量業務費の積算方式

(1) 用地測量業務費は次式によって積算する。

$$\begin{aligned} \text{用地測量業務費} &= (\text{測量作業費}) + (\text{測量調査費}) + (\text{消費税相当額}) \\ &= (\text{測量業務価格}) + (\text{消費税相当額}) \\ &= (\text{測量業務価格}) \times \{1 + (\text{消費税と地方消費税を合わせた税率})\} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
\text{測量業務価格} &= (\text{測量作業費}) + (\text{測量調査費}) \\
&= (\text{直接測量費}) + (\text{間接測量費}) + (\text{一般管理費等}) + (\text{測量調査費}) \\
&= (\text{直接測量費}) + (\text{諸経費}) + (\text{測量調査費}) \\
&= (\text{直接測量費}) \times \{1 + (\text{諸経费率})\} + (\text{測量調査費})
\end{aligned}$$

(2) 用地測量標準歩掛の補正率の積算

補正率は、地物による測量作業の難易によって測量等の業務の標準歩掛を補正するもので、補正の対象は各歩掛の次に掲げたものとする。

同様に、用地実測図等の縮尺によっても標準歩掛を補正する。

(補正率の計算例)

延長 20 km の用地測量において地域が下図のように分かれている場合は補正率表を参照して、次のとおりとなる。

大市街地 3km	市 街 地 乙 9km	耕 地 6km	都市近郊 2km
-------------	----------------	------------	-------------

$$\text{補正率} = \frac{2.0 \times 3 + 1.5 \times 9 + 1.0 \times 6 + 1.3 \times 2}{3 + 9 + 6 + 2} = \frac{28.1}{20} = 1.405 \text{ (補正率は調整しない)}$$

(3) 安全費の積算

① 交通整理等に要する費用は次式により算出して得た額とする。

$$(\text{安全費}) = \{ (\text{直接測量費}) - (\text{往復経費}) - (\text{成果検定費}) \} \times (\text{安全费率})$$

(注) 1 上式の直接測量費は、安全費を含まない費用である。

2 往復経費とは、宿泊を伴う場合で積算上の基地から滞在地までの旅行等に要する費用である。

安全费率は次表を標準とする。

(表一2)

場 所	大市街地	市街地甲	市街地乙・都市近郊	そ の 他
主として現道上	4.0%	3.5%	3.0%	2.5%
そ の 他	上記数値内で危険度に応じて計上することができる。			

② ①のほか、現場条件により安全対策上必要な費用は積み上げ計算により危険度に応じて算出する。

(4) 電子成果品作成費

「測量成果電子納品要領(案)」に基づく電子成果品の作成費用は、次の計算式により算出するものとする。ただし、これによりがたい場合は別途計上する。

$$\text{電子成果品作成費 (千円)} = 2.3 \times 0.44$$

ただし、 x : 直接人件費 (千円)

- (注) 1. 上式の電子成果品作成費の算出にあたっては、直接人件費を千円単位 (小数点以下切り捨て) で代入する。
2. 算出された電子成果品作成費 (千円) は、千円未満を切り捨てる (小数点以下切り捨て) ものとする。
3. 電子成果品作成費の上下限については、上限 : 170千円、下限 : 10千円とする。

(5) 技術管理費の積算

$$(\text{技術管理費}) = (\text{精度管理費}) + (\text{成果検定費})$$

① 精度管理費

精度管理費は、当該測量作業の精度を確保するために行う検測、精度管理表の作成及び機械器具の検定の費用であり、直接測量費のうち人件費、賃金及び機械経費の合計額に表-3による精度管理費係数を乗じたものとする。

$$\text{精度管理費} = \{ (\text{直接人件費}) + (\text{賃金}) + (\text{機械経費}) \} \times \text{精度管理費係数}$$

(表-3)

測 量 作 業 種 別		精度管理費係数
基準点測量	4級基準点測量	0.09
応 用 測 量	用地測量	0.07

(注) 用地測量の精度管理費対象業務 : 補助基準点の設置、境界点間測量、用地現況測量 (建物等)、面積計算、用地実測図原図作成、用地平面図作成、復元測量、現況実測平面図の作成、横断面図作成

② 成果検定費

成果検定費は、測量成果の検定を行うための費用であり、次式により算定して得た額とする。なお、成果検定費は諸経費の対象とはしない。

$$(\text{成果検定費}) = (\text{測量成果検定料}) \times (\text{作業量})$$

(6) 諸経費の積算

諸経費の積算については、別に定める諸経費率を適用し、次の式によって得た額を計上するものとする。

$$\text{諸経費} = \text{直接測量費} \times \text{諸経費率}$$

(注) 諸経費の対象となる直接測量費は、1円未満切捨てとする。

(7) 消費税相当額

消費税相当額は、直接測量費、諸経費の合計額に消費税と地方消費税を合わせた税率を乗じて得た額を計上するものとする。

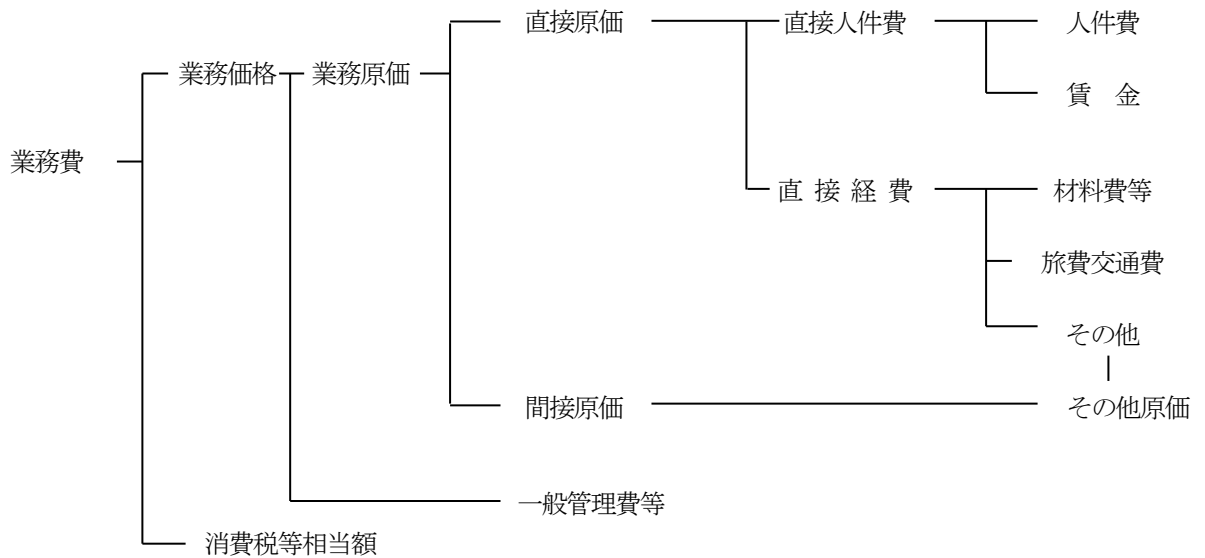
(8) その他

用地測量業務の標準歩掛のうち、2 打合せ協議 以外の歩掛には、関係機関協議資料作成及び関係機関打合せ協議に係る作業時間も含むものとする。

3-2 調査業務

(業務費の構成)

1 調査業務に係る業務費の構成は、原則として、次によるものとする。



(業務費の内容及び積算)

2 調査業務費

(1) 直接原価

直接原価は、直接人件費及び直接経費に区分して積算するものとし、積算の方法等は次によるものとする。

① 直接人件費

(ア) 人件費

人件費は、用地調査等業務に従事する技術者の人件費で、その基準日額は、原則として、次表のとおりとする。ただし、これによりがたい特別の事情がある場合には、その理由を明確にして、別途の基準単価を使用することができるものとする。

(表一1) 基準日額

区 分	基 準 日 額	摘 要
主任技師	別 途 通 知	
技 師 (A)		
技 師 (B)		
技 師 (C)		
技 術 員		

(イ) 賃金

賃金は、調査業務を実施するに当たって、掘削、樹木の伐採、保安要員等が特に必要と認められる場合に計上するものとし、その基準日額は普通作業員の日額による。

(ウ) 補正率の取扱い

各区分における単位当たりの直接人件費積算のための補正率の取扱いは、原則として次に例示する方法によるものとする。この場合の計上人員（歩掛）は、小数点以下第3位を切捨てとする。

なお、規定された規模補正を超える場合又は難易補正により難しい場合においては、見積を徴収するものとする。

(例示) 木造建物 A (表 2-5) の場合

職 種	(基 準 値)	補 正 率	(補 正 値)
	規 模		規 模
	70 m ² 以上 130 m ² 未満		200 m ² 以上 300 m ² 未満
技 師 A	0.51 人	1.80	0.91 人
技 師 B	1.55 人	1.80	2.79 人
技 師 C	1.10 人	1.80	1.98 人
技 術 員	0.12 人	1.80	0.21 人

注 補正率は、表 2-6 で定める率である。

② 直接経費

(ア) 材料費等

材料費等は、用地調査等業務を実施するに当たって必要な材料等の費用とし、補償コンサルタント登録規程（昭和 59 年 9 月 21 日建設省告示第 1341 号）第 7 条に定める完成業務原価報告書科目のうちトレース印刷費（図面、報告書等の成果物作成のためのトレース、浄書等及び印刷、陽画焼付、製本、写真代）及び消耗品費（用紙、ファイル、フィルム等の購入費）であって、次の式によって得た額を計上するものとする。

この場合の計上額は、1 円未満を切捨てとする。

材料費等＝直接人件費×7パーセント

(イ) 旅費交通費

旅費交通費は、調査業務を実施するために必要な交通、滞在、運搬等の費用とし、「県職員以外の者の旅費又は費用弁償に関する規則」に準じて積算するものとする。

ただし、これによりがたい場合は、別途の方法で計上することができるものとする。

通勤及び宿泊の区分

a 通勤により業務を行う場合

通勤により業務を行えるかどうかの判断は、下記を目安とする。

なお、現地での作業を伴う業務は連絡車（ライトバン）運転、その他の業務については公共交通機関を利用するものとして積算することを標準とする。

(i) 積算上の基地から現地まで、連絡車（ライトバン）運転によるものとして積算する場合は、積算上の基地から現地までの片道距離が 30 km 程度もしくは片道所要時間 1 時間程度とする。

(ii) 連絡車（ライトバン）運転費には、運転労務費を計上しない。

(表一2) 連絡車(ライトバン) 運転費 1日当たり単価表

項目	名称	規格	単位	員数	単価	金額	摘要
	ガソリン		ℓ		別途通知		ℓ/h×2
	損料	ライトバン 1,500 cc	h	2			運転時間当たり損料
	〃		日	1			供用日当たり損料
	雑品		式	1			
	計						

- (注) 1 運転労務費は計上しない。
2 ℓ/hは別途通知する基準による。

b 現地に滞在して業務を行う場合

上記aの範囲を超え、現地に滞在して業務を実施する必要がある場合は、「県職員以外の者の旅費又は費用弁償に関する規則」によるものとする。

(i) 往復費

往復費は、当該用地調査等業務を行う技術者の作業現場までの往復(目的地に到着した日と、目的地を出発する日)に要する費用であり補正率の対象としない。

(算定方法)

往復費 = (基準日額 + 日当交通費) × 往復 + 宿泊料 × 必要日数

交通費 = 運賃 + 特急料金(急行料金)

片道 100km以上	特急料金
片道 50km~100km未満	急行料金

(ii) 宿泊費

宿泊費は、当該用地調査等業務を行う者が業務のために現地に宿泊する費用である。

(iii) 日当

日当は、宿泊を伴う場合で、積算上の基地から目的地への往復に要した日数について計上する。

(2) その他原価

その他原価は間接原価及び直接経費(積上計上するものを除く)からなる。

なお、間接原価は、当該業務担当部署の事務職員の人件費および福利厚生費、水道光熱費等の経費とする。

(3) 一般管理費等

業務を処理する建設コンサルタント等における経費等のうち直接原価、間接原価以外の経費。一般管理費等は一般管理費及び付加利益よりなる。

① 一般管理費

一般管理費は、建設コンサルタント等の当該業務担当部署以外の経費であって、役員報酬、従業員給与手当、退職金、法定福利費、福利厚生費、事務用品費、通信交通費、動力用水光熱費、広告

宣伝費、交際費、寄付金、地代家賃、減価償却費、租税公課、保険料、雑費等を含む。

② 付加利益

付加利益は、当該業務を実施する建設コンサルタント等を継続的に運営するのに要する費用であって、法人税、地方税、株主配当金、役員賞与金、内部保留金、支払利息及び割引料、支払保証料その他の営業外費用等を含む。

(4) 業務委託料の積算

① 業務委託料の積算方式

業務委託料は、次の方式により積算する。

$$\begin{aligned} \text{業務委託料} &= (\text{業務価格}) + (\text{消費税等相当額}) \\ &= [\{ (\text{直接人件費}) + (\text{直接経費}) + (\text{その他原価}) \} + (\text{一般管理費等})] \times \{ 1 + (\text{消費税率}) \} \end{aligned}$$

② 各構成要素の算定

(7) 直接人件費

設計業務等に従事する技術者の人件費及び掘削作業等の作業員の賃金とする。なお、名称およびその基準日額は別途定める。

(イ) 直接経費

直接経費は、2 (1) ②の各項目について必要額を積算するものとする。

2 (1) ②の各項目以外に必要となるその他の費用については、その他原価として計上する。

(ウ) その他原価

その他原価は次式により算定した額の範囲内とする。

$$(\text{その他原価}) = (\text{直接人件費}) \times \alpha / (1 - \alpha)$$

ただし、 α は原価（直接経費の積上計上分を除く）に占めるその他原価の割合であり、35%とする。

(エ) 一般管理費等

一般管理費等は次式により算定した額の範囲内とする。

$$(\text{一般管理費等}) = (\text{業務原価}) \times \beta / (1 - \beta)$$

ただし、 β は業務価格に占める一般管理費等の割合であり、35%とする。

(オ) 消費税等相当額

消費税等相当額は、業務価格に消費税等の税率を乗じて得た額とする。

$$\begin{aligned} \text{消費税等相当額} &= [\{ (\text{直接人件費}) + (\text{直接経費}) + (\text{その他原価}) \} + (\text{一般管理費等})] \\ &\quad \times \{ 1 + (\text{消費税率}) \} \end{aligned}$$

(5) 作業区分の表示

① 作業区分

本歩掛の作業区分は、調査外業（調査）、調査内業（図面等）及び算定とする。

(7) 調査外業は、建物等の現地での調査及び官公庁その他関係する機関において諸調査を行うことをいう。

(イ) 調査内業は、調査外業における結果を基に図面、調査書の作成及び補償額又は費用負担額の算定に必要な諸数量の計算等の作業を行うことをいう。

(ウ) 算定は、調査内業の結果を基に各種単価の記入及び補償額、費用負担額等の計算並びに成果物の整理製本等の作業を行うことをいう。

3-3 履行期間の算定

(用地測量業務及び調査業務に係る履行期間)

1 履行期間の算定は、次式を参考に決定する。なお、履行期間に端数が生じる場合は、小数第1位以下切上げるものとする。また、各必要日数(W)は小数第3位(小数第4位以下切捨て)まで算出するものとする。

$$\text{履行期間} = \text{必要内業日数}(W_1) \times \text{不稼働係数(内業)} + \text{必要外業日数}(W_2) \times \text{不稼働係数(外業)} + \text{その他}$$

(1) 必要内外業日数(Wi)の算出

必要内外業日数の算出は、次式による技術者別の作業日数の合計値を比較し、最大となる日数を標準とする。

$$W_i = \Sigma (\text{各区分ごとの単位当たり技術者別内(外)業所要日数} \times \text{補正率} \times \text{対象数量})$$

(2) 不稼働係数

① 内業の不稼働係数

内業の不稼働係数は、1.47とする。

② 外業の不稼働係数

外業の不稼働係数は、1.89とする。

(3) その他

① 必要内外業期間内に下記の期間が含まれる場合は、その日数を加算するものとする。

年末年始・・・12/29～1/3 6日間

夏期休暇・・・8/14～8/16 3日間

② その他業務履行上必要な日数については、別途加算するものとする。

3-4 設計変更等

1 設計変更の積算

業務の設計変更は、官積算書を基にして次式により算出する。

$$\text{業務価格 (落札率を乗じた額)} = \text{変更官積算業務価格} \times \frac{\text{直前の請負額}}{\text{直前の官積算額}}$$

$$\text{変更業務委託料 (落札率を乗じた額)} = \text{業務価格} \times (1 + \text{消費税率})$$

注1 変更官積算業務価格は、官単位、官経費をもとに当初設計と同一方法により積算する。

注2 直前の請負額、直前の官積算額は、消費税等相当額を含んだ額とする。

3-5 設計等における数値の扱い

(1) 設計単価等の扱い

設計に使用する単価は、消費税抜きで積算するものとする。交通運賃等の内税で表示されている単価については、次式により求めた単価とする。

$$(\text{設計に使用する単価}) = (\text{内税単価}) \div (1 + \text{消費税率})$$

なお、算出された単価に端数が生じる場合は、1円単位（1円未満切捨て）とする。

(2) 端数処理等の方法

① 単価（単価表及び内訳書の各構成要素の単価）

単価に端数が生じる場合は、1円単位（1円未満切捨て）とする。

② 金額

各構成要素の金額（設計数量×単価）は、1円単位（1円未満切捨て）とする。

③ 歩掛

歩掛を補正する際の端数は、小数第2位（小数第3位以下切捨て）とする。

④ 単価表の合計金額

原則として、端数処理は行わない。

⑤ 内訳書の合計金額

原則として、端数処理は行わない。

⑥ 経費を算出する際の係数

経費を算出する際の係数（ $\alpha / (1 - \alpha)$ など）の端数は、個別に明記されている場合を除き、パーセント表示の小数第2位（小数第3位四捨五入）まで算出する。

⑦ 業務価格の端数処理

業務価格は、10,000円単位とする。10,000円単位での調整は諸経費又は一般管理費等で行う。なお、複数の諸経費又は一般管理費等を用いる場合であっても、各々の諸経費又は一般管理費等で端数調整（10,000円単位で切捨て）するものとする。

(3) 設計数量表示単位

① 設計数量の表示単位及び数値は、別表「設計数量表示単位一覧表」のとおりとする。

② 設計数量が設計表示単位に満たない場合は、有効数字1桁（有効数字2桁目四捨五入）の数量を設計表示単位とする。

③ 「設計数量表示単位一覧表」以外の工種について設計表示単位を定める必要が生じた場合は、同表及び業務内容等を勘案して適正に定めるものとする。

④ 設計計上数量は、算出された数量を設計表示単位に四捨五入して求めるものとする。

⑤ 設計数量の表示単位及び数値の適用は各細別毎を原則とし、工種・種別は「1式」を原則とする。

⑥ 設計表示数値に満たない設計変更は、契約変更の対象としないものとする。

3-6 用地測量業務に係る諸経費率

- 1 用地測量業務に係る諸経費率については、第1編測量業務 第1章測量業務積算基準 に定める諸経費率を適用するものとする。
- 2 用地測量業務と調査業務を合併して積算し発注する場合の用地測量業務に係る諸経費率は、用地測量業務の直接測量費に対する諸経費率によるものとする。

第4章 標準歩掛

4-1 用地測量業務

I 地域区分

地域	地域の状況	摘要
大市街地	家屋密度が90%程度の大都市の中心部	別図1参照
市街地(甲)	家屋密度が80%程度の大都市の中心部	別図2参照
市街地(乙)	上記以外の都市部(家屋密度60%程度)	別図3参照
都市近郊	土地に接続する家屋の散在している地域(家屋密度40%程度)	別図4参照
耕地	耕地及びこれに類似した地域で農地でなくともこの中に含む(家屋密度20%程度以下)	別図5参照
原野	木が少なく見通しのよい所	別図6参照
森林	木が多く見通しの悪い所	別図7参照

別図1 大市街地



別図2 市街地(甲)



別図3 市街地(乙)



別図4 都市近郊



別図5 耕地



別図6 原野



別図7 森林



II 標準歩掛

1 作業計画 (表1-1-1)

(1業務当たり)

区 分	人 員		
	測 量 主 任 技 師	測 量 技 師	測 量 技 師 補
内 業	0.8	1.1	1.1

(注) 復元測量または永久境界埋設を単独発注する場合は、計上しない。

2 打合せ協議 (表1-1-2)

(1業務当たり)

区 分	人 員		
	測 量 主 任 技 師	測 量 技 師	測 量 技 師 補
打合せ協議 (標準3回)	1.5	1.0	0.5

内 訳	第1回打合せ	0.5	0.5	—
	中間打合せ	0.5	—	0.5
	成果品納入時	0.5	0.5	—
関係機関協議用資料作成		—	0.25	0.25
関係機関打合せ協議		—	0.5	0.5

(注) 1 打合せ協議は3回を標準とするが、必要に応じて打合せ回数を増減する。打合せ回数を増加する場合は、1回について中間打合せ1回の人員を加算するものとする。

2 打合せ協議には、打合せ議事録の作成時間及び移動時間 (片道所要1時間程度以内) を含むものとする。

3 打合せ協議には、電話、電子メールによる確認等に要した作業時間を含むものとする。

4 関係機関打合せ協議の回数は、1機関当たり1回程度とする。なお、発注者のみのが直接関係機関と協議する場合は、関係機関打合せ協議を計上しない。

3 現地踏査 (表1-1-3)

(1業務当たり)

区 分	人 員		
	測 量 主 任 技 師	測 量 技 師	測 量 技 師 補
外 業	1.0	1.0	1.0

(注) 復元測量または永久境界埋設を単独発注する場合は、計上しない。

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	1.5%	材 料 費	5.0%

補正率

地域区分	大市街地	市街地 甲	市街地 乙	都市近郊	耕 地	原 野	森 林
補 正 率	2.0	1.8	1.5	1.3	1.0	0.7	1.0

4 公図等の転写 (表1-1-4)

(10,000 m²当たり)

区 分	人 員	
	測 量 技 師 補	測 量 助 手
外 業	0.3	0.3
内 業	0.4	0.4

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	1.0%	材 料 費	2.0%

補正率

地域区分	大市街地	市街地 甲	市街地 乙	都市近郊	耕 地	原 野	森 林
補 正 率	2.0	1.8	1.5	1.3	1.0	0.7	1.0

5 公図等転写連続図作成 (表1-1-5)

(10,000 m²当たり)

区 分	人 員	
	測 量 技 師 補	測 量 助 手
内 業	0.5	0.5

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	—	材 料 費	1.0%

6 地積測量図転写 (表1-1-6)

(10,000 m²当たり)

区 分	人 員	
	測 量 技 師 補	測 量 助 手
外 業	0.4	0.4
内 業	0.2	0.3

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	1.5%	材 料 費	0.5%

補正率

地域区分	大市街地	市街地 甲	市街地 乙	都市近郊	耕 地	原 野	森 林
補 正 率	2.0	1.8	1.5	1.3	1.0	0.7	1.0

7 土地の登記記録調査（表1-1-7）

(10,000 m²当たり)

区分	人 員	
	測 量 技 師 補	測 量 助 手
外 業	0.3	0.3
内 業	0.6	0.6

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	0.5%	材 料 費	0.5%

補正率

地域区分	大市街地	市街地 甲	市街地 乙	都市近郊	耕 地	原 野	森 林
補 正 率	2.0	1.8	1.5	1.3	1.0	0.7	1.0

8 建物の登記記録調査（表1-1-8）

(10戸当たり)

区分	人 員	
	測 量 技 師 補	測 量 助 手
外 業	0.1	0.1
内 業	0.1	0.1

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	1.0%	材 料 費	0.5%

9 権利者確認調査（当初）（表1-1-9）

(10,000 m²当たり)

区分	人 員	
	測 量 技 師 補	測 量 助 手
外 業	0.2	0.2
内 業	0.7	0.7

(注) 権利者確認調査（当初）とは、登記名義人の所在の特定（相続が発生している場合には相続人の有無の確認まで）を行うものである。

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	0.5%	材 料 費	—

補正率

地域区分	大市街地	市街地 甲	市街地 乙	都市近郊	耕地	原野	森林
補正率	2.0	1.8	1.5	1.3	1.0	0.7	1.0

10 権利者確認調査（追跡）（表 1-1-10）

(10人当たり)

区分	人 員	
	測量技師補	測量助手
外業	0.5	0.5
内業	2.3	2.3

(注) 権利者確認調査（追跡）とは、相続が発生している場合に当初で確認された相続人以降の確認調査である。

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	0.5%	材 料 費	—

11 境界確認（表 1-1-11）

(10,000 m²当たり)

区分	人 員			
	測量主任技師	測量技師	測量技師補	測量助手
外業	1.0	1.0	1.0	1.0
内業	—	0.7	0.7	—

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	0.5%	材 料 費	5.0%

補正率

地域区分	大市街地	市街地 甲	市街地 乙	都市近郊	耕地	原野	森林
補正率	2.0	1.8	1.5	1.3	1.0	0.7	1.0

12 土地境界立会確認書作成（表 1-1-12）

(10,000 m²当たり)

区分	人 員	
	測量技師補	測量助手
外業	0.8	0.8
内業	0.4	0.4

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	1.5%	材 料 費	0.5%

補正率

地域区分	大市街地	市街地 甲	市街地 乙	都市近郊	耕 地	原 野	森 林
補 正 率	2.0	1.8	1.5	1.3	1.0	0.7	1.0

13 補助基準点の設置 (表 1-1-13)

(10,000 m²当たり)

区 分	人 員			
	測 量 技 師	測 量 技 師 補	測 量 助 手	測 量 補 助 員
外 業	0.8	0.8	0.8	0.8
内 業	0.4	0.4	0.4	—

(注) 10,000 m²当たり標準補助基準点は10点とする。

各費目の直接人件費に対する割合				精度管理費係数	
費 目	割 合	費 目	割 合	対象費目	係数
機 械 経 費	2.0%	材 料 費	4.0%	直接人件費+賃金+機械経費	0.07

補正率

地域区分	大市街地	市街地 甲	市街地 乙	都市近郊	耕 地	原 野	森 林
補 正 率	2.0	1.8	1.5	1.3	1.0	0.7	1.0

14 境界測量 (表 1-1-14)

(10,000 m²当たり)

区 分	人 員			
	測 量 技 師	測 量 技 師 補	測 量 助 手	測 量 補 助 員
外 業	1.4	1.4	1.4	1.4
内 業	0.7	0.7	0.7	—

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	2.0%	材 料 費	2.5%

補正率

地域区分	大市街地	市街地 甲	市街地 乙	都市近郊	耕 地	原 野	森 林
補 正 率	2.0	1.8	1.5	1.3	1.0	0.7	1.0

15 境界点間測量 (表 1-1-15)

(10,000 m²当たり)

区 分	人 員		
	測 量 技 師	測 量 技 師 補	測 量 助 手
外 業	1.2	1.2	1.2
内 業	0.2	0.4	0.4

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	2.5%	材 料 費	4.0%

精度管理費係数	
対象費目	係数
直接人件費+賃金+機械経費	0.07

補正率

地域区分	大市街地	市街地 甲	市街地 乙	都市近郊	耕 地	原 野	森 林
補 正 率	2.0	1.8	1.5	1.3	1.0	0.7	1.0

16 用地現況測量 (建物等) (表 1-1-16)

(10,000 m²当たり)

区 分	人 員			
	測 量 技 師	測 量 技 師 補	測 量 助 手	測 量 補 助 員
外 業	0.6	0.6	0.6	0.6
内 業	0.3	0.3	0.3	—

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	2.0%	材 料 費	3.0%

精度管理費係数	
対象費目	係数
直接人件費+賃金+機械経費	0.07

(注) 1 用地現況測量 (建物等) については、公共用地境界確定協議の現況実測平面図作成と測量箇所が重複する場合は、その数量を控除するものとする。

17 用地境界仮杭設置 (表 1-1-17)

(10,000 m²当たり)

区 分	人 員			
	測 量 技 師	測 量 技 師 補	測 量 助 手	測 量 補 助 員
外 業	0.8	0.8	0.8	0.8
内 業	0.3	0.3	0.3	—

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	2.0%	材 料 費	5.5%

補正率

地域区分	大市街地	市街地 甲	市街地 乙	都市近郊	耕地	原野	森林
補正率	2.0	1.8	1.5	1.3	1.0	0.7	1.0

18 面積計算 (表 1-1-18)

(10,000 m²当たり)

区 分	人 員		
	測 量 技 師	測 量 技 師 補	測 量 助 手
内 業	2.2	2.2	2.2

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	—	材 料 費	—

精度管理費係数	
対象費目	係数
直接人件費+賃金+機械経費	0.07

補正率

地域区分	大市街地	市街地 甲	市街地 乙	都市近郊	耕地	原野	森林
補正率	2.0	1.8	1.5	1.3	1.0	0.7	1.0

19 用地実測図原図作成 (表 1-1-19)

(10,000 m²当たり)

区 分	人 員		
	測 量 技 師	測 量 技 師 補	測 量 助 手
内 業	1.3	1.7	1.7

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	—	材 料 費	—

精度管理費係数	
対象費目	係数
直接人件費+賃金+機械経費	0.07

補正率 (縮尺)

1/250	1/500	1/1000
1.2	1.0	0.9

20 用地平面図作成 (表 1-1-20)

(10,000 m²当たり)

区 分	人 員		
	測 量 技 師	測 量 技 師 補	測 量 助 手
内 業	0.5	0.9	0.9

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	—	材 料 費	0.5%

精度管理費係数	
対象費目	係数
直接人件費+賃金+機械経費	0.07

補正率（縮尺）

1/250	1/500	1/1000
1.2	1.0	0.9

21 土地調書作成（表1-1-21）

（10,000 m²当たり）

区 分	人 員	
	測 量 技 師 補	測 量 助 手
内 業	0.9	0.9

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	—	材 料 費	—

補正率

地域区分	大市街地	市街地 甲	市街地 乙	都市近郊	耕 地	原 野	森 林
補 正 率	2.0	1.8	1.5	1.3	1.0	0.7	1.0

22 地積測量図等の作成（表1-1-22）

（1筆当たり）

区 分	人 員
	測 量 技 師 補
内 業	0.15

（注） 土地所在図の作成を含む。

23 不動産調査報告書の作成（表1-1-23）

（1筆当たり）

区 分	人 員
	測 量 技 師 補
外 業	0.1
内 業	0.2

24 用地境界杭設置 (表 1-1-24)

(10本当たり)

区 分	人 員			
	測 量 技 師	測 量 技 師 補	測 量 助 手	測 量 補 助 員
外 業	—	1.2	1.2	1.2
内 業	—	0.5	0.5	—

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	3.0%	材 料 費	20.0%

25 復元測量 (表 1-1-25)

(10,000 m²当たり)

区 分	人 員			
	測 量 技 師	測 量 技 師 補	測 量 助 手	測 量 補 助 員
外 業	1.7	1.7	1.7	1.7
内 業	0.5	0.5	0.5	—

(注) 復元測量とは、境界確認において境界を確定するうえで法務局において提出済の地積測量図
他参考資料による杭の復元を行うものである。

各費目の直接人件費に対する割合				精度管理費係数	
費 目	割 合	費 目	割 合	対象費目	係数
機 械 経 費	2.0%	材 料 費	4.0%	直接人件費+賃金+機械経費	0.07

補正率

地域区分	大市街地	市街地 甲	市街地 乙	都市近郊	耕 地	原 野	森 林
補 正 率	2.0	1.8	1.5	1.3	1.0	0.7	1.0

26 公共用地管理者との打合せ (表 1-1-26)

(1業務当たり)

区 分	人 員		
	測 量 主 任 技 師	測 量 技 師	測 量 技 師 補
外 業	0.7	0.8	0.6
内 業	0.4	0.8	0.6

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	0.5%	材 料 費	0.5%

27 現況実測平面図の作成 (表 1-1-27)

(10,000 m²当たり)

区 分	人 員		
	測 量 技 師	測 量 技 師 補	測 量 助 手
外 業	1.2	1.2	1.2
内 業	0.4	0.7	0.7

(注) 現況実測平面図作成については、既存の地図等を利用する場合は計上しないものとする。

各費目の直接人件費に対する割合				精度管理費係数	
費 目	割 合	費 目	割 合	対象費目	係数
機 械 経 費	2.5%	材 料 費	3.5%	直接人件費+賃金+機械経費	0.07

補正率

地域区分	大市街地	市街地 甲	市街地 乙	都市近郊	耕 地	原 野	森 林
補 正 率	2.0	1.8	1.5	1.3	1.0	0.7	1.0

変化率 (縮尺)

1/250	1/500	1/1000
+0.2	0.0	-0.2

(注) 1 現況実測平面図作成は、縮尺 1/500 を標準としており、それと異なる場合は変化率を適用する。

2 縮尺の補正は、上記地域区分の補正率に、縮尺に対応する変化率を加算・減算して適用する。(例：地域区分が市街地乙で、図面縮尺が 1/250 の場合は、補正率 1.7=1.5+0.2)

28 横断面図作成 (表 1-1-28)

(1km当たり)

区 分	人 員			
	測 量 技 師	測 量 技 師 補	測 量 助 手	測 量 補 助 員
外 業	2.5	2.5	2.5	2.5
内 業	—	3.0	3.7	—

各費目の直接人件費に対する割合				精度管理費係数	
費 目	割 合	費 目	割 合	対象費目	係数
機 械 経 費	1.5%	材 料 費	2.0%	直接人件費+賃金+機械経費	0.07

補正率

地域区分	大市街地	市街地 甲	市街地 乙	都市近郊	耕 地	原 野	森 林
補 正 率	2.0	1.8	1.5	1.3	1.0	0.7	1.0

29 依頼書作成 (表 1-1-29)

(1km当たり)

区 分	人 員		
	測量主任技師	測 量 技 師	測 量 技 師 補
内 業	0.6	1.4	1.4

30 協議書作成 (表 1-1-30)

(1km当たり)

区 分	人 員		
	測量主任技師	測 量 技 師	測 量 技 師 補
外 業	0.9	0.9	0.9
内 業	0.9	0.9	2.1

各費目の直接人件費に対する割合			
費 目	割 合	費 目	割 合
機 械 経 費	0.5%	材 料 費	0.5%

Ⅲ 機械経費及び材料費の構成

工 程	機械経費の構成				材 料 費 の 構 成				
	名 称	規格	単位	数量	品 名	規 格	単位	数量	摘 要
現 地 踏 査	ライトバン 供用日損料 運転時間損料	1500cc	台日	1.0	ガソリン		ℓ	5.2	2.6ℓ×2.0h
			台時	2.0	雑品		式	1	
	雑器材		式	1					
公図等の転写	ライトバン 供用日損料 運転時間損料	1500cc	台日	0.3	ポリエステルシート	0.9m×20m	本	0.04	#300
			台時	0.6	ガソリン		ℓ	1.5	2.6ℓ×0.6h
	雑器材		式	1					
公図等転写 連続図作成	雑器材		式	1	ポリエステルシート	0.9m×20m	本	0.02	#300
地積測量図転写	ライトバン 供用日損料 運転時間損料	1500cc	台日	0.4	ガソリン		ℓ	2.0	2.6ℓ×0.8h
			台時	0.8					
	雑器材		式	1					
土地の 登記記録調査	ライトバン 供用日損料 運転時間損料	1500cc	台日	0.3	ガソリン		ℓ	1.5	2.6ℓ×0.6h
			台時	0.6					
建物の 登記記録調査	ライトバン 供用日損料 運転時間損料	1500cc	台日	0.1	ガソリン		ℓ	0.5	2.6ℓ×0.2h
			台時	0.2					
権利者確認調査 (当初)	ライトバン 供用日損料 運転時間損料	1500cc	台日	0.2	ガソリン		ℓ	1.0	2.6ℓ×0.4h
			台時	0.4					
権利者確認調査 (追 跡)	ライトバン 供用日損料 運転時間損料	1500cc	台日	0.5	ガソリン		ℓ	2.6	2.6ℓ×1.0h
			台時	1.0					

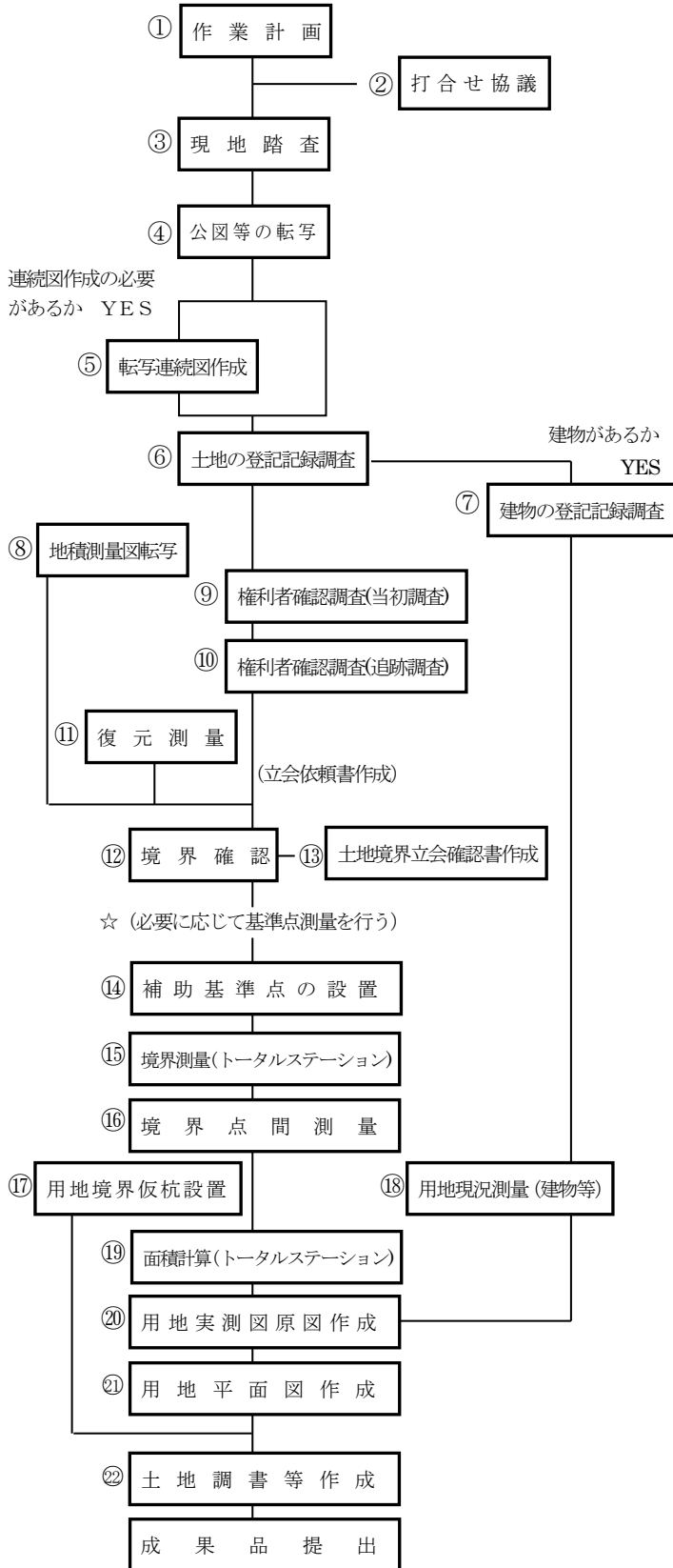
工 程	機械経費の構成				材 料 費 の 構 成				
	名 称	規格	単位	数量	品 名	規 格	単位	数量	摘 要
境 界 確 認	ライトバン 供用日損料 運転時間損料	1500cc	台日	1.0	木杭又は プラスチック杭	4.5cm× 4.5cm×45cm	本	73	
			台時	2.0	ガソリン		ℓ	5.2	2.6ℓ×2.0h
	雑器材		式	1	雑品		式	1	
土地境界立会 確認書の作成	ライトバン 供用日損料 運転時間損料	1500cc	台日	0.8	ガソリン		ℓ	4.1	2.6ℓ×1.6h
			台時	1.6					
	雑器材		式	1					
補助基準点 の設置	トータル ステーション	3級	台日	0.8	木杭又は プラスチック杭	6.0cm× 6.0cm×60cm	本	10	
	ライトバン 供用日損料 運転時間損料	1500cc	台日	0.8	ガソリン		ℓ	4.1	2.6ℓ×1.6h
			台時	1.6	雑品		式	1	
	雑器材		式	1					
境 界 測 量	トータル ステーション	3級	台日	1.4	ガソリン		ℓ	7.2	2.6ℓ×2.8h
	ライトバン 供用損料 運転時間損料	1500cc	台日	1.4	雑品		式	1	
			台時	2.8					
	雑器材		式	1					
境 界 点 間 測 量	トータル ステーション	3級	台日	1.2	ガソリン		ℓ	6.2	2.6ℓ×2.4h
	ライトバン 供用損料 運転時間損料	1500cc	台日	1.2	雑品		式	1	
			台時	2.4					
	雑器材		式	1					
用地現況測量 (建物等)	トータル ステーション	3級	台日	0.6	ガソリン		ℓ	3.1	2.6ℓ×1.2h
	ライトバン 供用損料 運転時間損料	1500cc	台日	0.6	雑品		式	1	
			台時	1.2					
雑器材		式	1						

工 程	機械経費の構成				材 料 費 の 構 成				
	名 称	規格	単位	数量	品 名	規 格	単位	数量	摘 要
用地境界仮杭設置	トータルステーション	3級	台日	0.8	木杭又はプラスチック杭	6.0cm×6.0cm×60cm	本	24	
	ライトバン 供用損料 運転時間損料	1500cc	台日	0.8	ガソリン		ℓ	4.1	2.6ℓ×1.6h
			台時	1.6	雑品		式	1	
	雑器材		式	1					
面積計算	雑器材		式	1					
用地実測図原図作成	雑器材		式	1	ポリエステルシート	0.9m×20m	本	0.02	#500
用地平面図作成	雑器材		式	1	ポリエステルシート	0.9m×20m	本	0.03	#300
用地境界杭設置	トータルステーション	3級	台日	1.2	コンクリート杭又はプラスチック杭	12cm×12cm×90cm 9cm×9cm×90cm	本	10	
	ライトバン 供用損料 運転時間損料	1500cc	台日	1.2	ガソリン		ℓ	6.2	2.6ℓ×2.4h
			台時	2.4	雑品		式	1	
	雑器材		式	1					
復元測量	トータルステーション	3級	台日	1.7	木杭又はプラスチック杭	4.5cm×4.5cm×45cm	本	34	
	ライトバン 供用損料 運転時間損料	1500cc	台日	1.7	ガソリン		ℓ	8.8	2.6ℓ×3.4h
			台時	3.4	雑品		式	1	
	雑器材		式	1					
公共用地管理者との打合せ	ライトバン 供用日損料 運転時間損料	1500cc	台日	0.8	ガソリン		ℓ	4.1	2.6ℓ×1.6h
			台時	1.6	雑品		式	1	
	雑器材		式	1					
現況実測平面図作成	トータルステーション	3級	台日	1.2	ポリエステルシート	0.9m×20m	本	0.02	#300
	ライトバン 供用損料 運転時間損料	1500cc	台日	1.2	ガソリン		ℓ	6.2	2.6ℓ×2.4h
			台時	2.4	雑品		式	1	
	雑器材		式	1					

工 程	機械経費の構成				材 料 費 の 構 成				
	名 称	規格	単位	数量	品 名	規 格	単位	数量	摘 要
横断面図作成	トータル ステーション	3級	台日	2.5	ポリエステル	0.9m×20m	本	0.02	#300
	ライトバン 供用損料 運転時間損料	1500cc	台日	2.5	ガソリン		ℓ	13.0	2.6ℓ×5.0h
			台時	5.0	雑品		式	1	
	雑器材		式	1					
依 頼 書 作 成	雑器材		式	1					
協 議 書 作 成	ライトバン 供用日損料 運転時間損料	1500cc	台日	0.9	ガソリン		ℓ	4.6	2.6ℓ×1.8h
			台時	1.8	雑品		式	1	
	雑器材		式	1					

IV 作業フローチャート

1 用地測量業務フローチャート



作業内容

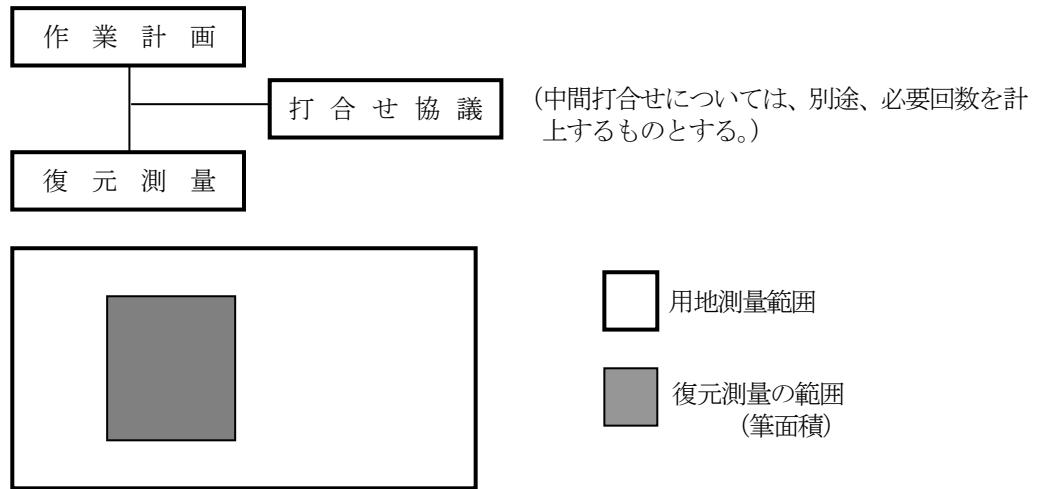
- ① 作業内容の確認、作業計画書作成、必要資料等の収集、資料検討、機材準備
- ② 発注機関との打合せ協議（中間打合せについては基準書によるものとする。）
- ③ 現地の状況把握、範囲の確認等
- ④ 閲覧申請書作成、転写、着色、補足事項転記、分割転写図合成、製図（トレース図）転写作業者名等の記載
- ⑤ 編集、土地取得予定線・図業界の記入、製図（トレース）、作成作業者名記入
- ⑥ 閲覧交付申請書作成、登記事項証明書または登記簿謄本交付申請・受領、土地の登記記録調査表（一覧）・土地の登記記録調査表作成
- ⑦ 閲覧交付申請書作成、登記事項証明書または登記簿謄本交付申請・受領、建物の登記記録調査表（一覧）・建物の登記記録等調査表作成
- ⑧ 閲覧申請書作成、転写
- ⑨ 交付申請書作成、法人登記簿謄本交付申請・受領、権利者調査表作成、連絡先調査
- ⑩ 交付申請書作成、相続関係説明図作成、権利者調査表作成、連絡先調査
- ⑪ 資料調査（明示確定図、地積測量図等）、現地踏査（境界点・基準点・引照点等観測）、変換計算、逆打計算、復元杭設置
- ⑫ 資料作成、立会日時・作業手順の検討、立会依頼書・立会人名簿作成、立会、境界杭設置
- ⑬ 土地境界立会確認書作成、権利者・隣接者の署名押印
- ☆別途計上する
- ⑭ 既存基準点の成果表借用、基準点検測、踏査・選点、観測、杭設置、計算、基準点網図、成果表作成
- ⑮ 観測、計算、計算簿・境界点網図作成
- ⑯ 観測、座標値からの距離計算、較差による判定
- ⑰ 交点計算、用地境界仮杭設置
- ⑱ 細部測量、編集済データの作成
- ⑲ 座標法または数値三斜法による面積計算、土地の登記記録調査表への記入
- ⑳ データ入力、細部編集、図化
- ㉑ データ入力、図化
- ㉒ 土地調書及び不動産調査報告書の作成

備考 建物の登記記録調査でその戸数に含まれる建物の定義について
一面の敷地内において一所有者が所有する建物を一戸とする。この場合、
建物の登記記録において複数棟になっていても一戸とみなす。

2 単独で発注する場合のフローチャート

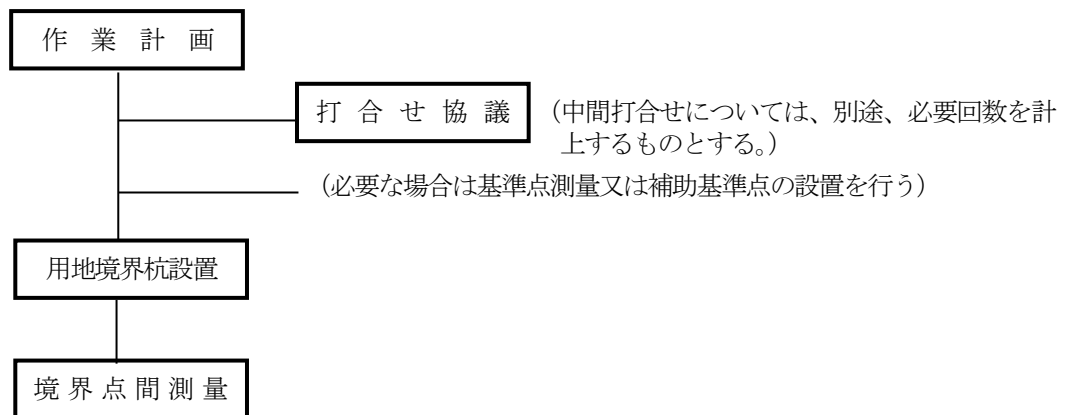
(1) 復元測量

境界確認において、境界を確定するうえで法務局において提出済の地積測量図他参考資料による境界杭の復元



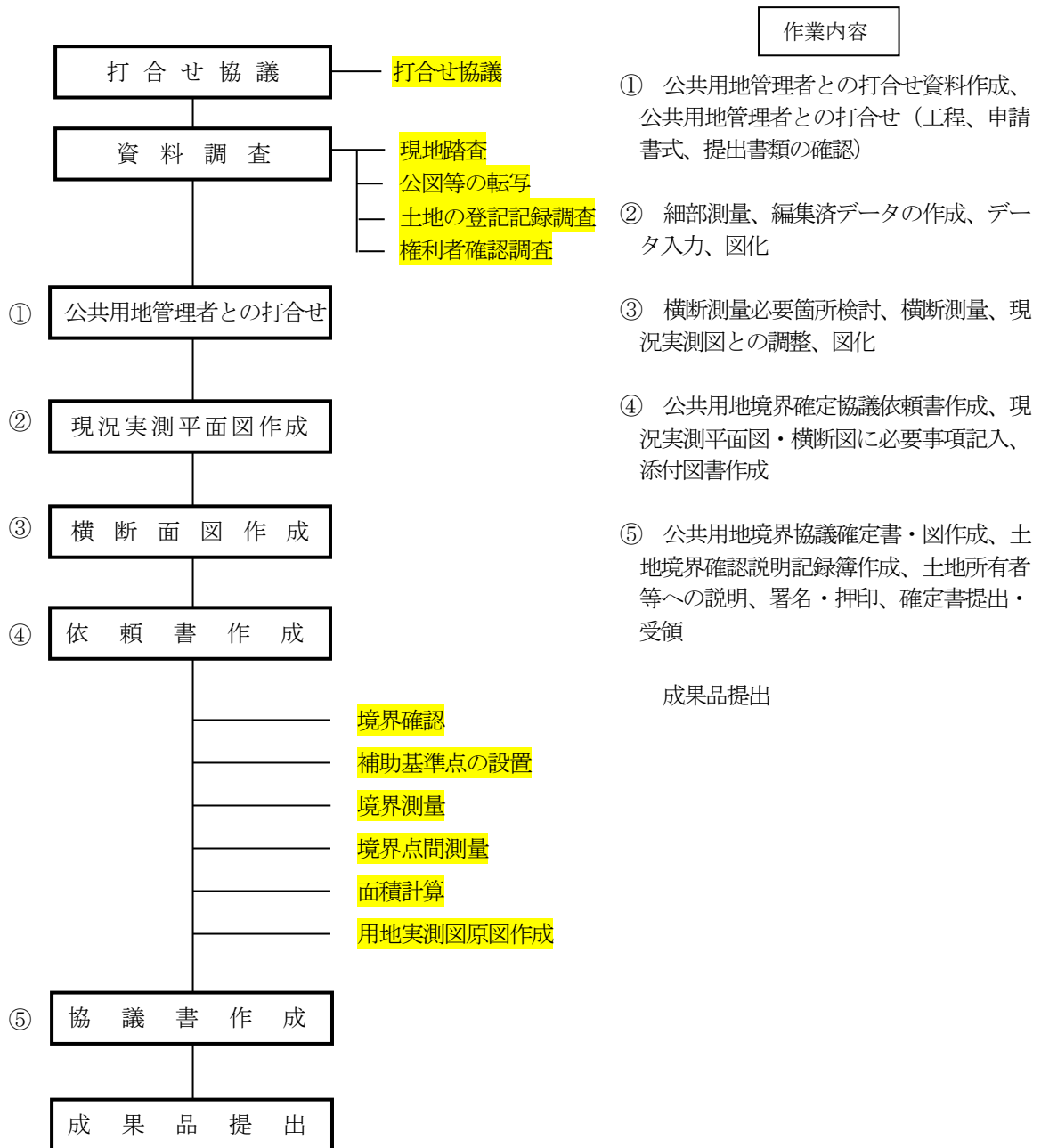
(2) 用地境界杭設置

用地管理のために用地幅杭または用地境界仮杭をコンクリート製の用地境界杭にする場合に適用する。



3 公共用地境界確定協議業務フローチャート

この業務は、里道、水路等の管理者との境界確定協議を作成する必要がある場合のみ適用する。
用地測量と同時発注とする。



備考 網掛け部分については用地測量と重複する部分である。

4-2 調査業務

I 共通

1 打合せ協議

用地調査等業務の実施に際して行う打合せ協議の直接人件費の積算は、表1-1により行うものとする。

なお、用地測量業務と用地調査等業務を合併して積算し発注する場合は、主たる業務の打合せ回数を適用する。

表1-1

種目	単位	規模	職種	外業			備考
				業務着手時	中間打合せ	成果物納入時	
打合せ協議	業務	—	主任技師	0.50	0.50	0.50	中間打合せ 1回あたり
			技師 A	0.50	0.50	0.50	
			技師 B	0.50	0.50	0.50	

注1 打合せ協議には、打合せ記録簿の作成時間及び移動時間（片道所要時間1時間程度以内）を含むものとする。

注2 中間打合せの回数は、各業務区分に記載の標準回数を基本とし、必要に応じて、中間打合せ回数を増減して計上するものとする。

注3 複数の業務区分（例：Ⅱ 建物等の調査とⅣ 営業その他の調査 など）の業務を同時に発注する場合は、各業務区分の中間打合せ回数をそれぞれ計上するものとする。

注4 計上する中間打合せは、発注者及び受注者の双方において打合せを行う必要があると判断され、（主任）監督員と、主任担当者を含む担当技術者又は業務従事者によって、対面方式により行われるものに限る。

2 作業計画の策定

用地調査等業務の実施に伴う作業計画書の作成に要する直接人件費の積算は、表1-2により行うものとする。

表1-2

種目	単位	規模	職種	内業	備考
作業計画書の作成	業務	—	主任技師	0.38	
			技師 A	0.38	

II 建物等の調査

1 建物等の区分

建物等の調査は、表2-1の区分によって行うものとする。

表2-1

区 分	区 分 の 細 目
建 物	木造建物の調査及び算定
	木造特殊建物の調査及び算定
	非木造建物の調査及び算定
工 作 物	機械設備の調査及び算定
	生産設備の調査及び算定
	附帯工作物（敷地内の立竹木を含む。）の調査及び算定
	立竹木の調査及び算定
	庭園の調査及び算定
	墳墓等の調査及び算定

2 打合せ協議

中間打合せの回数は、2回を標準とし、必要に応じて打合せ回数を増減する。

3 現地踏査

現地踏査は、当該調査業務の着手に先立ち現地の概況を把握するもので（以下、各業務区分において同じ）、これに要する直接人件費の積算は、表2-2により行うものとする。

この場合において複数の業務区分を同一の業務として発注する場合（例：II 建物等の調査 以外に IV 営業その他の調査、V 予備調査 等の同一発注を行う等）は、各業務区分の現地踏査費用をそれぞれ計上するものとする。（以下、各業務区分において同じ）

表2-2

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	備 考
現地踏査	業 務	—	主任技師	0.50	
			技師 A	0.50	
			技師 B	0.50	

4 建物の調査

建物調査を行う場合の木造建物、木造特殊建物及び非木造建物の判断基準は、表2-3によるものとする。

表2-3

区 分	判 断 基 準
木造建物	主要構造部（壁、柱、床、はり、屋根又は階段）が主として、木材によって建築されている建物

木造特殊建物	木造建物のうち建築に特殊な技能を必要とする神社、仏閣、教会堂、茶室、土蔵造等の建物
非木造建物	主要構造部が主として、木材以外の材料によって建築されている建物（鉄骨造、鉄筋コンクリート造、鉄骨鉄筋コンクリート造、石造、コンクリートブロック造等）

(1) 木造建物の調査及び算定

木造建物の調査及び算定を行う場合の区分は、表2-4によるものとし、各区分の直接人件費の積算は、表2-5により行うものとする。ただし、Vの予備調査を行っているものについては、歩掛（調査外業、調査内業（図面等））を70パーセントに補正するものとする。

表2-4

区 分	判 断 基 準
木造建物 A	専用住宅、併用住宅、店舗、医院、診療所、共同住宅（アパート）、寄宿舎、その他これらに類するもの
木造建物 B	農家住宅、公衆浴場、劇場、映画館、旅館、病院、学校、その他これらに類するもの
木造建物 C	工場、倉庫、車庫、体育館、畜舎、付属家、その他これらに類するもの ただし、倉庫、車庫、付属家等で附帯工作物として取扱うことが相当なものを除く

表2-5

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
木造建物A	棟	70 m ² 以上 130 m ² 未満	技師 A	0.30	0.09	0.12	0.51 人	
			技師 B	0.30	0.83	0.42	1.55 人	
			技師 C	0.30	0.62	0.18	1.10 人	
			技 術 員	—	—	0.12	0.12 人	
木造建物B	棟	70 m ² 以上 130 m ² 未満	技師 A	0.35	0.09	0.12	0.56 人	
			技師 B	0.35	1.02	0.42	1.79 人	
			技師 C	0.35	0.75	0.18	1.28 人	
			技 術 員	—	—	0.12	0.12 人	
木造建物C	棟	70 m ² 以上 130 m ² 未満	技師 A	0.21	0.09	0.09	0.39 人	
			技師 B	0.21	0.57	0.32	1.10 人	
			技師 C	0.21	0.25	0.18	0.64 人	
			技 術 員	—	—	0.12	0.12 人	

注 本表規模欄に定める面積以外の場合は、表2-6の補正率表を適用するものとする。

表 2-6

建 物 延べ面積	70 m ² 未満	70 m ² 以上 130 m ² 未満	130 m ² 以上 200 m ² 未満	200 m ² 以上 300 m ² 未満
補正率	0. 8 0	1. 0 0	1. 3 0	1. 8 0

300 m ² 以上 450 m ² 未満	450 m ² 以上 600 m ² 未満	600 m ² 以上 1,000 m ² 未満	1,000 m ² 以上 1,400 m ² 未満
2. 4 0	3. 0 0	4. 0 0	5. 3 0

(2) 木造特殊建物の調査及び算定

木造特殊建物の調査及び算定の直接人件費の積算は、表 2-7 により行うものとする。

ただし、Vの予備調査を行っているものについては、歩掛（調査外業、調査内業（図面等））を 70 パーセントに補正するものとする。

表 2-7

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
木造特殊建物	棟	50 m ² 以上 70 m ² 未満	主任技師	0.74	0.12	0.12	0.98 人	
			技師 A	0.74	2.43	—	3.17 人	
			技師 B	0.74	0.54	0.81	2.09 人	
			技師 C	—	0.27	0.06	0.33 人	
			技 術 員	—	—	0.12	0.12 人	

注 本表規模欄に定める面積以外の場合は、表 2-8 の補正率表を適用するものとする。

表 2-8

建 物 延べ面積	50 m ² 未満	50 m ² 以上 70 m ² 未満	70 m ² 以上 130 m ² 未満	130 m ² 以上 200 m ² 未満
補正率	0. 8 0	1. 0 0	1. 4 0	1. 9 0

200 m ² 以上 300 m ² 未満	300 m ² 以上 500 m ² 未満	500 m ² 以上 700 m ² 未満
2. 6 0	3. 5 0	4. 7 0

(3) 非木造建物の調査及び算定

非木造建物の調査及び算定を行う場合は、表2-9の構造別区分及び表2-10の用途による区分によるものとし、各区分の直接人件費の積算は、表2-11により行うものとする。

ただし、Vの予備調査を行っているものについては、歩掛（調査外業、調査内業（図面等））を70パーセントに補正するものとする。

表2-9

区 分	構 造
非木造建物A	鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造、鉄骨造のうち耐火被覆を行うもの（S耐火）
非木造建物B	鉄骨造（非木造建物Aを除く）、軽量鉄骨造
非木造建物C	コンクリートブロック造、石造、れんが造
非木造建物D	プレハブ造（鉄骨系、コンクリート系、木質系）

表2-10

区 分	判 断 基 準	補正率
イ	店舗、事務所、病院、学校、マンション、アパート、住宅、その他これらに類するもの	1.0
ロ	劇場、映画館、公会堂、神社、仏閣、その他これらに類するもの	1.3
ハ	工場、倉庫、車庫、体育館、その他これらに類するもの。 ただし、倉庫、車庫、付属家等で附帯工作物として取扱うことが相当なものを除く	0.7

構造計算を行わない場合

表2-11

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
非木造建物A	棟	200 m ² 以上 400 m ² 未満	主任技師	0.87	0.42	0.30	1.59人	用途による区分イの場合
			技師 A	0.87	1.81	—	2.68人	
			技師 B	0.87	3.62	1.35	5.84人	
			技師 C	—	0.27	0.39	0.66人	
			技 術 員	—	—	0.12	0.12人	

非木造建物B	棟	200 m ² 以上 400 m ² 未満	主任技師	0.67	0.42	0.30	1.39人	用途による区分イの場合
			技師 A	0.67	1.41	—	2.08人	
			技師 B	0.67	2.71	1.15	4.53人	
			技師 C	—	0.27	0.39	0.66人	
			技 術 員	—	—	0.12	0.12人	
非木造建物C	棟	200 m ² 以上 400 m ² 未満	主任技師	0.98	0.19	0.19	1.36人	用途による区分イの場合
			技師 A	0.98	1.41	—	2.39人	
			技師 B	0.98	2.97	0.81	4.76人	
			技師 C	—	0.27	0.39	0.66人	
			技 術 員	—	—	0.12	0.12人	
非木造建物D	棟	70 m ² 以上 130 m ² 未満	主任技師	—	—	—	—	用途による区分イの場合
			技師 A	0.41	0.12	0.06	0.59人	
			技師 B	0.41	1.47	0.27	2.15人	
			技師 C	0.41	0.66	0.19	1.26人	
			技 術 員	—	—	0.12	0.12人	

構造計算を行う場合

表2-11

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
非木造建物A	棟	200 m ² 以上 400 m ² 未満	主任技師	0.87	0.42	0.30	1.59人	用途による区分イの場合
			技師 A	0.87	9.64	—	10.51人	
			技師 B	0.87	3.62	1.35	5.84人	
			技師 C	—	0.27	0.39	0.66人	
			技 術 員	—	—	0.12	0.12人	
非木造建物B	棟	200 m ² 以上 400 m ² 未満	主任技師	0.67	0.42	0.30	1.39人	用途による区分イの場合
			技師 A	0.67	8.12	—	8.79人	
			技師 B	0.67	2.71	1.15	4.53人	
			技師 C	—	0.27	0.39	0.66人	
			技 術 員	—	—	0.12	0.12人	
非木造建物C	棟	200 m ² 以上 400 m ² 未満	主任技師	0.98	0.19	0.19	1.36人	用途による区分イの場合
			技師 A	0.98	6.40	—	7.38人	
			技師 B	0.98	2.97	0.81	4.76人	
			技師 C	—	0.27	0.39	0.66人	
			技 術 員	—	—	0.12	0.12人	

非木造建物D	棟	70 m ² 以上 130 m ² 未満	主任技師	—	—	—	—	用途によ る区分イ の場合
			技師 A	0.41	1.47	0.06	1.94人	
			技師 B	0.41	1.47	0.27	2.15人	
			技師 C	0.41	0.66	0.19	1.26人	
			技 術 員	—	—	0.12	0.12人	

注 本表規模欄に定める面積以外の場合は、表2-12の補正率表を適用するものとする。
ただし、非木造建物Dにあつては、木造建物の表2-6の補正率表を適用するものとする。

表2-12

建 物 延べ面積	200 m ² 未満	200 m ² 以上 400 m ² 未満	400 m ² 以上 600 m ² 未満	600 m ² 以上 1,000 m ² 未満
補正率	0.80	1.00	1.40	1.90

1,000 m ² 以上 1,500 m ² 未満	1,500 m ² 以上 2,000 m ² 未満	2,000 m ² 以上 3,000 m ² 未満	3,000 m ² 以上 4,000 m ² 未満
2.60	3.20	4.10	5.20

4,000 m ² 以上 5,000 m ² 未満	5,000 m ² 以上 7,000 m ² 未満	7,000 m ² 以上 10,000 m ² 未満	10,000 m ² 以上 15,000 m ² 未満
6.20	7.50	9.50	12.30

15,000 m ² 以上 21,000 m ² 未満
15.90

5 建物等の法令適合性の調査及び算定

建物等の法令適合性の調査を行う対象法令を建築基準法第35条（特殊建築物等の避難及び消火に関する技術的基準）、第61条（防火地域内の建築物）及び第62条（準防火地域内の建築物）とし、必要に応じ施設改善費用に係る運用益損失額の算定を行うもので、その区分は、表2-13によるものとし、各区分の直接人件費の積算は、表2-14により行うものとする。

表2-13

区 分	区 分 の 細 目
法令適合性調査 (1)	木造建物（建築基準法第61条及び第62条に該当する建築物）
法令適合性調査 (2)	木造建物（建築基準法第35条、第61条及び第62条に該当する建築物）
法令適合性調査 (3)	木造建物・非木造建物（建築基準法第35条に該当する建築物）

表2-14

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
法令適合性 調査 (1) 木造建物	棟	—	技師 A	—	—	0.06	0.06 人	
			技師 B	—	0.43	0.18	0.61 人	
			技師 C	—	0.43	—	0.43 人	
法令適合性 調査 (2) 木造建物	棟	—	技師 A	—	—	0.06	0.06 人	
			技師 B	—	1.18	0.43	1.61 人	
			技師 C	—	1.12	—	1.12 人	
法令適合性 調査 (3) 木造建物・非木造建物	棟	—	技師 A	—	—	0.06	0.06 人	
			技師 B	—	0.75	0.31	1.06 人	
			技師 C	—	0.68	—	0.68 人	

6 工作物等の調査

(1) 機械設備

機械設備とは、原動機等により製品等の製造又は加工等を行うもの、又は製造等に直接係わらない機械を主体とした排水処理施設等であって、キュービクル式受変電設備、建築設備以外の動力設備、ガス設備、給・排水設備等の配管、配線及び機器類を含むものをいう。

① 機械設備の区分

機械設備の調査及び算定を行う場合は、表2-15の区分によるものとする。

ただし、調査対象となる工場等に設置されている機械設備状況が次の各号のうち2以上該当すると認められる場合には、区分を1ランク上げることができるものとする。

(例 機械設備BをCとする。)

- (ア) 機械設備の数が標準的（作業員が安全上心配なく作業できる。）工場より多い。
- (イ) 配管、配線の系統が複雑（クロスしたり分岐、集合している。）かつ多い。
- (ウ) 自動（ロボット）化された機械が比較的多い。
- (エ) プラント（原材料を投入すれば製品または半製品となる。）化機械（装置）が多い。
- (オ) 規模の大きな機械が多い。
- (カ) 特殊な機械が多い。
- (キ) 製品等の多種品の製造装置を持っている。
- (ク) 受電契約電圧が6,000V以上である。

表 2-15

区 分	判 断 基 準
機械設備 A	<p>設置面積（建物内以外で機械設備を設置してある面積を含む。）が 200 m²未満であるすべての業種 この面積に、生産設備が設置されている面積を除く。</p>
機械設備 B	<p>イ 製糸、製綿、合成繊維織物、毛織物、タオル製造、メリヤス製造、被服製造、染色等の繊維工業 ロ コンクリート・アスファルト（レディーミクスト工場）製品製造、建材製品製造、陶磁器製造、ガラス製品製造、瓦・煉瓦製造、碎石、研磨材製造等の窯業コンクリート工業 ハ 機械靴、靴製造、なめし革製造、毛皮製品製造等の皮革製品製造業 ニ 製材・合板製造、家具製造、建具製造等の製材、木製品工業 ホ 石油類貯蔵販売、圧縮ガス・液化ガス製造等の危険物貯蔵・製造業 ヘ 製紙、紙加工品、紙製衛生品等の紙・紙加工工業 ト 鋳物、鍛造等の鋳鍛製造工業 チ 自動車整備工場</p>
機械設備 C	<p>イ 一般印刷、グラビア印刷、金属印刷、写真製版、製本等の印刷・製本工業 ロ 金属工作機械、金属加工機械、産業機械、化学機械、土木建築機械等の機械、器具製造業 ハ 作業工具、鉄骨製造、プレス、ねじ・ばね、金属洋食器、金属建具・家具、メッキ、型加工等の金属製品工業 ニ 缶詰、清涼飲料、味噌醤油、酒類、菓子・パン、めん類製粉、冷凍品加工飼料、有機質肥料等の食料品工業 ホ アルミニウム合金、軽金属圧延、軽金属製品製造、電線、ダイカスト等の非鉄金属工業 ヘ プラスチック成形、楽器製造、玩具等のその他製造業</p>
機械設備 D	<p>イ 塗料製造、医薬品、工業薬品、ゴム精製・製造、石油製品等の化学工業 ロ 高炉、電気炉、製鋼、圧延、引抜、各種精錬等の製鉄・製鋼等の工業 ハ 電動機、配電盤、電線器具、通信機器部品、電気音響機器、電子機器等の電気機械器具製造業 ニ 自動車部品、自動車車体、自動車製造、鉄道車輛部品、自転車製造、船舶製造、産業用運搬車輛製造等の輸送機械製造業 ホ 精密機械器具、計量器・測定器・試験機、写真機・同部品、時計・同部品、医療用機械器具、光学機械器具等の精密機械器具製造業 ヘ 上水道施設、簡易水道施設、下水道処理施設、火葬場、と殺場、廃棄物処理等</p>
機械設備 E	<p>機械設備 D に掲げる業種のうち、(1) 機械設備の区分のただし書きに該当すると判断されたもの</p>

② 機械設備の調査及び算定

機械設備の調査及び算定の区分ごとの直接人件費の積算は、表2-16により行うものとする。ただし、Vの予備調査を行っているものについては、歩掛（調査外業、調査内業（図面等））を70パーセントに補正するものとする。

なお、直接人件費の積算に当たっては、次の事項に留意して行うものとする。

- (7) 規模欄の設置面積は、機械設備が設置されている面積とするが、機械設備本体のみでなく、配管配線、機械安全スペース等の状況を考慮して設定するものとする。
- (イ) 機械設備の高さは、3メートル未満までを標準とし、3メートル以上の機械設備が存するときは、設置面積に当該機械設備本体の設置面積を加算するものとする。

表2-16

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
機械設備A	事業所	設置面積 100㎡以上 200㎡未満	主任技師	0.44	0.14	0.40	0.98人	
			技師 A	0.44	0.75	0.40	1.59人	
			技師 B	0.44	0.93	—	1.37人	
			技 術 員	—	—	0.22	0.22人	
機械設備B	事業所	設置面積 400㎡以上 600㎡未満	主任技師	0.94	0.42	0.60	1.96人	
			技師 A	0.94	2.29	2.31	5.54人	
			技師 B	0.94	2.76	—	3.70人	
			技 術 員	—	—	0.63	0.63人	
機械設備C	事業所	設置面積 400㎡以上 600㎡未満	主任技師	1.18	0.42	0.60	2.20人	
			技師 A	1.18	2.87	2.89	6.94人	
			技師 B	1.18	3.45	—	4.63人	
			技 術 員	—	—	0.63	0.63人	
機械設備D	事業所	設置面積 400㎡以上 600㎡未満	主任技師	1.35	0.42	0.60	2.37人	
			技師 A	1.35	3.30	3.33	7.98人	
			技師 B	1.35	3.97	—	5.32人	
			技 術 員	—	—	0.63	0.63人	
機械設備E	事業所	設置面積 400㎡以上 600㎡未満	主任技師	1.53	0.42	0.60	2.55人	
			技師 A	1.53	3.73	3.76	9.02人	
			技師 B	1.53	4.49	—	6.02人	
			技 術 員	—	—	0.63	0.63人	

注 本表規模欄に定める面積以外の場合は、表2-17の補正率表を適用するものとする。

機械設備Aの場合

表2-17

機械設備の面積	100 m ² 未満	100 m ² 以上 200 m ² 未満
補正率	0.80	1.00

機械設備B、C、D及びEの場合

機械設備の面積	200 m ² 以上 400 m ² 未満	400 m ² 以上 600 m ² 未満	600 m ² 以上 1,000 m ² 未満	1,000 m ² 以上 1,500 m ² 未満
補正率	0.80	1.00	1.30	1.80

1,500 m ² 以上 2,000 m ² 未満	2,000 m ² 以上 3,000 m ² 未満	3,000 m ² 以上 5,000 m ² 未満	5,000 m ² 以上 8,000 m ² 未満
2.30	2.90	4.00	5.60

8,000 m ² 以上 12,000 m ² 未満	12,000 m ² 以上 20,000 m ² 未満	20,000 m ² 以上 30,000 m ² 未満	30,000 m ² 以上 40,000 m ² 未満
7.50	10.40	14.00	17.60

③ 機械設備（生産設備を含む。）の見積

機械設備（生産設備を含む。）の見積とは、機器等購入費等を算定するに当たり専門的な知識が必要であり、かつ、専門メーカー等でなければ算定が困難と認められる機器等についての見積の徴収に必要な費用とし、これに要する直接人件費の積算は、表2-18によって行うものとする。

表2-18

区分	単位	職種	外業	内業		計	備考
			調査	図面等	算定		
機械設備の見積	台 (装置)	主任技師 技師 A	0.14	—	0.43	0.57人	
			0.14	0.91	0.14	1.19人	

注1 類似する機械設備が複数あるときは、それらについては1台（装置）当たりの歩掛を70パーセントに補正するものとする。

注2 現地調査を行うことが困難なときは、調査内業（図面等）の歩掛を100パーセントを超え150パーセント以下の範囲で補正することができるものとする。

注3 本表は、原則として2社の見積の徴収に要する費用を含んだ歩掛である。

(2) 生産設備

生産設備とは、当該設備が製品等の製造に直接・間接的に係わっているもの又は営業を行う上で必要となる設備をいう。

① 生産設備の区分

生産設備の調査及び算定を行う場合は、表2-19の区分によるものとする。

表2-19

区 分	判 断 基 準
生産設備A	製品等の製造、育生、養殖等に直接係わるもの 園芸用フレーム、わさび畑、養殖池（場）（ポンプ排水設備等を含む）、牛、豚、鶏、その他の家畜の飼育又は調教施設等
生産設備B	営業を目的に設置されているもの又は営業上必要なもの テニスコート、ゴルフ練習場等の施設（上家、ボール搬送機又はボール洗い機等を含む）、自動車練習場のコース、遊園地（公共的な公園及び当該施設に附帯する駐車場を含む）、釣り堀、貯木場等
生産設備C	製品等の製造、育生、養殖又は営業には直接的に係わらないが、間接的に必要となるもの 工場等の貯水池、浄水池（調整池及び沈殿池を含む）、駐車場、運動場等の厚生施設等
生産設備D	上記AからCまでに例示するもの以外で次に例示するもの コンクリート等の煙突、給水塔、規模の大きな貯水槽又は浄水槽、鉄塔、送電設備、飼育用サイロ、用水堰、橋、火の見櫓、規模の大きなむろ、炭焼釜等

② 生産設備の調査及び算定

生産設備の調査及び算定の区分ごとの直接人件費の積算は、表2-20により行うものとする。ただし、Vの予備調査を行っているものについては、歩掛（調査外業、調査内業（図面等））を70パーセントに補正するものとする。なお、生産設備AからCまでの設備区域内に生産設備Dが存する場合には、生産設備Dは計上しないものとする。

表2-20

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
生産設備A	設 備 当 たり	設置面積 300 m ² 以上 500 m ² 未満	技師 A	0.30	0.06	0.06	0.42 人	
			技師 B	0.30	0.66	0.31	1.27 人	
			技師 C	0.30	0.58	0.06	0.94 人	
			技 術 員	—	—	0.06	0.06 人	
生産設備B	設 備 当 たり	設置面積 300 m ² 以上 500 m ² 未満	技師 A	0.38	0.06	0.06	0.50 人	
			技師 B	0.38	0.83	0.37	1.58 人	
			技師 C	0.38	0.66	0.06	1.10 人	
			技 術 員	—	—	0.06	0.06 人	
生産設備C	設 備 当 たり	設置面積 300 m ² 以上 500 m ² 未満	技師 A	0.22	0.06	0.06	0.34 人	
			技師 B	0.22	0.56	0.25	1.03 人	
			技師 C	0.22	0.50	0.06	0.78 人	
			技 術 員	—	—	0.06	0.06 人	
生産設備D	箇 所	—	技師 A	0.13	0.06	0.06	0.25 人	
			技師 B	0.13	0.31	0.12	0.56 人	
			技師 C	0.13	0.27	0.06	0.46 人	
			技 術 員	—	—	0.06	0.06 人	

注 本表規模欄に定める面積以外の場合は、表2-21の補正率表を適用するものとする。

表2-21

設備の 延べ面積	300 m ² 未満	300 m ² 以上 500 m ² 未満	500 m ² 以上 800 m ² 未満	800 m ² 以上 1,300 m ² 未満	1,300 m ² 以上 2,000 m ² 未満
補正率	0.80	1.00	1.30	1.90	2.60

2,000 m ² 以上 3,000 m ² 未満	3,000 m ² 以上 5,000 m ² 未満	5,000 m ² 以上 7,000 m ² 未満	7,000 m ² 以上 9,000 m ² 未満
3.40	4.70	6.20	7.50

③ 生産設備の見積

生産設備の見積とは、設備等購入費等を算定するに当たり専門的な知識が必要であり、かつ、専門メーカー等でなければ算定が困難と認められる設備等についての見積の徴収に必要な費用とし、これに要する直接人件費の積算は、表2-22によって行うものとする。

表2-22

区 分	単 位	職 種	外 業	内 業		計	備 考
			調 査	図面等	算 定		
生産設備の見積	台 (設備)	主任技師	0.23	—	0.36	0.59人	
		技師 A	0.23	0.41	0.23	0.87人	

注1 類似する生産設備が複数あるときは、それらについては1台（設備）当たりの歩掛を70パーセントに補正するものとする。

注2 現地調査を行うことが困難なときは、調査内業（図面等）の歩掛を100パーセントを超え150パーセント以下の範囲で補正することができるものとする。

注3 本表は、原則として2社の見積の徴収に要する費用を含んだ歩掛である。

(3) 附帯工作物（敷地内の立竹木を含む。）の調査及び算定

附帯工作物とは、建物及び他の工作物区分に属するもの以外のすべてのものをいい、これらの調査区分は、表2-23によるものとし、各区分の直接人件費の積算は、表2-24により行うものとする。

ただし、Vの予備調査を行っているものについては、歩掛（調査外業、調査内業（図面等））を70パーセントに補正するものとする。

表2-23

区 分	判 断 基 準
住宅敷地A	住宅等の敷地であって、一画地の敷地面積が150 m ² 未満のもの
住宅敷地B	住宅等の敷地であって、一画地の敷地面積が150 m ² から200 m ² 程度のもの
住宅敷地C	住宅等の敷地であって、一画地の敷地面積が200 m ² から600 m ² 程度のもの
農家敷地A	農家住宅等の敷地であって、一画地の敷地面積が600 m ² から1,000 m ² 程度のもの
農家敷地B	農家住宅等の敷地であって、一画地の敷地面積が1,000 m ² 以上のもの
工場等の敷地	工場、店舗、神社、仏閣等の敷地であって、その面積が500 m ² 以上になっているもの
独立工作物	独立看板、広告塔、野立木等

注1 住宅等の敷地であって600 m²以上の場合は、農家敷地Aとし、農家住宅等の敷地であって600 m²未満のときは、住宅敷地Cとして取り扱うものとする。

注2 附帯工作物の調査範囲内で庭園の調査区域とした範囲は、附帯工作物の調査面積から除くものとする。

表2-24

区 分	単位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備考
				調 査	図面等	算 定		
住宅敷地A	戸	敷地面積 150 m ² 未満	技師 A	0.20	0.10	0.06	0.36人	
			技師 B	0.20	—	0.28	0.48人	
			技師 C	0.20	0.70	0.22	1.12人	
			技 術 員	—	—	0.06	0.06人	
住宅敷地B	戸	敷地面積 150 m ² 以上 200 m ² 未満	技師 A	0.26	0.10	0.07	0.43人	
			技師 B	0.26	—	0.39	0.65人	
			技師 C	0.26	1.24	0.35	1.85人	
			技 術 員	—	—	0.07	0.07人	
住宅敷地C	戸	敷地面積 200 m ² 以上 600 m ² 未満	技師 A	0.47	0.10	0.07	0.64人	
			技師 B	0.47	—	0.61	1.08人	
			技師 C	0.47	2.06	0.45	2.98人	
			技 術 員	—	—	0.07	0.07人	
農家敷地A	戸	敷地面積 600 m ² 以上 1,000 m ² 未満	技師 A	0.65	0.09	0.07	0.81人	
			技師 B	0.65	—	0.88	1.53人	
			技師 C	0.65	2.79	0.77	4.21人	
			技 術 員	—	—	0.07	0.07人	
農家敷地B	戸	敷地面積 1,000 m ² 以上	技師 A	0.91	0.19	0.13	1.23人	
			技師 B	0.91	—	1.11	2.02人	
			技師 C	0.91	3.90	1.01	5.82人	
			技 術 員	—	—	0.13	0.13人	
工場等の敷地	箇所	敷地面積 500 m ² 以上 1,000 m ² 未満	技師 A	0.41	0.23	0.22	0.86人	
			技師 B	0.41	—	0.83	1.24人	
			技師 C	0.41	2.30	0.42	3.13人	
			技 術 員	—	—	0.18	0.18人	
独立工作物	箇所	—	技師 A	0.13	0.12	0.12	0.37人	
			技師 B	0.13	—	0.30	0.43人	
			技師 C	0.13	0.61	0.09	0.83人	
			技 術 員	—	—	0.15	0.15人	

注1 工場等の敷地面積の認定は、当該敷地面積から生産設備及び建物外に設置されている機械設備及び墓地として計上した面積を控除した面積とする。

注2 工場等の敷地で本表規模欄に定める面積以外の場合は、表2-25の補正率表を適用するものとする。

注3 附帯工作物の調査範囲内で庭園の調査区域とした範囲は、附帯工作物の調査面積から除くものとする。

表2-25

敷地の面積	500 m ² 未満	500 m ² 以上 1,000 m ² 未満	1,000 m ² 以上 2,000 m ² 未満	2,000 m ² 以上 4,000 m ² 未満	4,000 m ² 以上 8,000 m ² 未満
補正率	0.80	1.00	1.60	2.50	4.00

8,000 m ² 以上 12,000 m ² 未満	12,000 m ² 以上 20,000 m ² 未満	20,000 m ² 以上 28,000 m ² 未満
5.70	7.80	10.40

(4) 立竹木の調査及び算定

立竹木の調査及び算定は、表2-26の区分によって行うものとし、各区分の直接人件費の積算は、表2-27により行うものとする。この場合の直接人件費は次式によるものとする。

$$\text{直接人件費} = \left(\text{単位当たりの直接人件費} \times \frac{\text{調査対象面積}}{1,000} \right)$$

ただし、表2-26の区分欄の庭木等に掲げるものについては、(3) 附帯工作物 に含めて調査するものとする。

表2-26

区 分	判 断 基 準
庭 木 等	<p>まつ、かや、まき、つばき等の立木で、観賞上の価値又は防風、防雪その他の効用を有する住宅、店舗、工場等の敷地に植栽されているもの（自生木を含み、庭園及び墳墓を構成するものを除く。）をいい、次に掲げる種別により区分する。</p> <p>A 観賞樹</p> <p>観賞上の価値を有すると認められる立木であって、高木（針葉樹及び広葉樹）、株物類、玉物類、生垣用木、特殊樹（観賞用竹を含む）をいう。</p> <p>① 高 木 モミジ、ハナミズキなどのように主幹と側枝の区分が概ね明らかで、樹高が大きくなるものをいう。</p> <p>② 株 物 アジサイ、ナンテンなどのように、通常幹又は枝が根元から分枝したもので、樹高が大きくなるものものをいう。</p> <p>③ 玉 物 マメツゲ、ツツジなどのように枝葉が地上近くまで繁茂し、全体として球状を呈し、樹高が大きくなるものものをいう。</p> <p>④ 生 垣 宅地等の境界付近において直線的に密植したもので、囲障に相当するものをいう。</p> <p>⑤ 特殊樹 ①～④に該当するものを除く。</p> <p>B 利用樹</p> <p>防風、防雪その他の効用を目的として植栽されている立木で、主に屋敷回りに生育するものをいう。</p> <p>C 風致木</p> <p>名所又は旧跡の風致保存を目的として植栽されている立木又は風致を保持させるために植栽されている立木をいう。</p> <p>D 地被類</p> <p>観賞等を目的に植え付けられた多年生植物で、木本系及び草本系をいう。</p> <p>① 木本系 ササ類など地上部が木質に近く株状に生育するものをいい、自然発生ものを除く。</p> <p>② 草本系 リュウノヒゲなど地上部が草状の葉や茎となり、株状に生育するもの及びシバザクラなど草状の低い地上部が地面を這うように</p>

	<p>面状に生育するものをいい、自然発生ものを除く。</p> <p>E 芝類 観賞等を目的に植え付けられた多年生植物で、日本芝及び西洋芝をいう。</p> <p>① 日本芝 高麗芝、野芝のように冬季は枯れて冬眠に入るが、根は越冬し、暑さに強い芝類をいい、自然発生ものは除く。</p> <p>② 西洋芝 ケンタッキーブルーグラスのように冬季でも緑を保つが暑さに弱い芝類をいい、自然発生ものを除く。</p> <p>F ツル性類 観賞等を目的に植え付けられた多年生植物で、自ら直立することなく地上を這い、あるいは他の物への巻き付きや吸着根により壁面、支柱、棚の登坂又は下垂する茎を持つもの(木質化するものを除く。)をいい、自然発生ものを除く。</p> <p>G その他 観賞等を目的として植え付けられた、上記の区分に属するもの以外の多年生植物をいい、自然発生ものを除く。</p>
用材林	<p>ひのき、すぎ等の立木で用材とすることを目的としているもの又は用材の効用を有していると認められるものをいう。</p>
薪炭林	<p>なら、くぬぎ等の立木で薪、炭等とすることを目的としているもの又はこれらの効用を有していると認められるものをいう。</p>
収穫樹	<p>A 果樹 りんご、みかん等の立木で果実等の収穫を目的としているものをいい、栽培方法の差異による区分は次のとおり。</p> <p>① 園栽培 一団の区画内(果樹園等)において、集約的かつ計画的に肥培管理を行って栽培しているものをいう。</p> <p>② 散在樹 園栽培以外の収穫樹、例えば宅地内或いは田・畑の畦畔、原野及び林地等に散在するものをいう。</p> <p>B 特用樹 茶、桑、こうぞ等のように、枝葉、樹皮の利用を目的とする樹木をいい、園栽培と散在樹の区分は、果樹の例による。</p>
竹林	<p>孟宗竹、真竹等で竹材又は筍の収穫を目的としている竹林をいう。</p>
苗木 (植木畑)	<p>営業用樹木で育苗管理している植木畑の苗木をいう。</p>

表2-27

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
用材林	1,000 m ²	—	主任技師	—	—	0.04	0.04人	
			技師 B	0.23	0.07	0.07	0.37人	
			技師 C	0.23	0.47	0.18	0.88人	
			技術員	0.23	—	0.15	0.38人	
薪炭林	1,000 m ²	—	主任技師	—	—	0.06	0.06人	
			技師 B	0.36	0.11	0.10	0.57人	
			技師 C	0.36	0.68	0.31	1.35人	
			技術員	0.36	—	0.15	0.51人	
収穫樹	1,000 m ²	—	主任技師	—	—	0.08	0.08人	吊り棚、囲障等の調査及び算定を含む。
			技師 B	0.34	0.12	0.10	0.56人	
			技師 C	0.34	0.91	0.38	1.63人	
			技術員	0.34	—	0.21	0.55人	
竹 林	1,000 m ²	—	主任技師	—	—	0.04	0.04人	
			技師 B	0.14	0.13	0.06	0.33人	
			技師 C	0.14	0.48	0.13	0.75人	
			技術員	0.14	—	0.14	0.28人	
苗木 (植木畑)	1,000 m ²	—	技師 B	0.50	0.04	0.04	0.58人	囲障等の調査及び算定を含む。
			技師 C	0.50	0.52	0.37	1.39人	
			技術員	0.50	—	0.06	0.56人	

注 調査区域の地形等によって表2-28の補正を行うものとする。

表2-28

地 形	判 断 基 準	補正率
平坦地	平坦な土地	1.00
丘陵地	ゆるやかな起伏のある土地	1.00
傾斜地	かなり勾配のある土地	1.30
急傾斜地	急峻な土地 (傾斜角度が概ね30°以上)	1.40

(5) 庭園の調査及び算定

庭園とは、立竹木、調査区域(敷地)内にあつて、庭石、灯籠、築山、池等によって造形されており、総合的美的景観が形成されているものをいい、その区分は、表2-29によるものとし、各区分の直接人件費の積算は、表2-30により行うものとする。

表2-29

区 分	判 断 基 準
庭 園 A	神社、仏閣その他にあつて史跡等の指定を受けているもの、又はこれに準ずると認められるもの
庭 園 B	上記A以外の庭園、及び店舗、旅館、会館等にあつて庭石、石組、灯籠、築山、池等によって造形されており、総合的美的景観が形成されていると認められるもの
庭 園 C	上記A及びB以外の庭園であつて、庭石、石組、灯籠、築山、池等によって造形されており、総合的美的景観が形成されていると認められるもの。

表2-30

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
庭 園 A	箇所	200 m ² 以上 400 m ² 未満	技師 A	0.88	0.12	0.12	1.12 人	
			技師 B	0.88	1.00	0.75	2.63 人	
			技師 C	0.88	1.93	0.75	3.56 人	
			技 術 員	—	—	0.12	0.12 人	
庭 園 B	箇所	200 m ² 以上 400 m ² 未満	技師 A	0.63	0.12	0.12	0.87 人	
			技師 B	0.63	0.93	0.68	2.24 人	
			技師 C	0.63	1.81	0.68	3.12 人	
			技 術 員	—	—	0.12	0.12 人	
庭 園 C	箇所	200 m ² 以上 400 m ² 未満	技師 A	0.47	0.08	0.08	0.63 人	
			技師 B	0.47	0.75	0.56	1.78 人	
			技師 C	0.47	1.50	0.56	2.53 人	
			技 術 員	—	—	0.12	0.12 人	

注1 本表規模欄に定める面積以外の場合は、表2-31の補正率表を適用するものとする。

注2 庭園の調査区域とした場合には、附帯工作物の調査面積から除くものとする。

表2-31

設備の延べ 面 積	200 m ² 未満	200 m ² 以上 400 m ² 未満	400 m ² 以上 600 m ² 未満	600 m ² 以上 1,000 m ² 未満
補正率	0.80	1.00	1.40	1.90

1,000 m ² 以上 2,000 m ² 未満	2,000 m ² 以上 5,000 m ² 未満	5,000 m ² 以上 10,000 m ² 未満	10,000 m ² 以上 14,000 m ² 未満
2.90	5.20	8.70	12.00

(6) 墳墓等の調査及び算定

墳墓等とは、墳墓を設けるために墓地として都道府県知事の許可を受けた区域又はこれと同等と認めることが相当な区域内に存する死体を埋葬し、又は焼骨を埋蔵する施設であつて、これに付随する工作物及び立竹木を含むものをいい、その区分は、表2-32によるものとし、各区分の単位当たり直接人件費の積算は、表2-33により行うものとする。

この場合の直接人件費は、次式によるものとする。

$$\text{直接人件費} = \left(\text{単位当たり直接人件費} \times \frac{\text{調査対象面積}}{10} \right)$$

表2-32

区 分		判 断 基 準
寺院又は公営（私営を含む）墳墓	墳墓 A	墓地使用（祭祀）者の使用範囲が区画されており、一画地の面積が3～4㎡程度のもの (10㎡当たり3画地程度)
	墳墓 B	墓地使用（祭祀）者の使用範囲が区画されており、一画地の面積が1.5～2㎡程度のもの (10㎡当たり5画地程度)
	墳墓 C	墓地使用（祭祀）者の使用範囲が区画されており、一画地の面積が1.5㎡以下程度のもの (10㎡当たり7画地程度)
上記以外の墳墓	墳墓 D	墓地使用（祭祀）者の使用範囲が明確になっていないが、10㎡当たり3基～5基程度あるもの
	墳墓 E	墓地使用（祭祀）者の使用範囲が明確になっていないが、10㎡当たり7基程度あるもの

表2-33

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
墳 墓 A	10 m ²	3画地程度	主任技師	—	—	0.05	0.05人	
			技師 A	0.16	0.08	0.06	0.30人	
			技師 B	0.16	0.27	0.33	0.76人	
			技師 C	0.16	0.17	—	0.33人	
			技 術 員	—	—	0.16	0.16人	
墳 墓 B	10 m ²	5画地程度	主任技師	—	—	0.05	0.05人	
			技師 A	0.25	0.08	0.06	0.39人	
			技師 B	0.25	0.46	0.56	1.27人	
			技師 C	0.25	0.17	—	0.42人	
			技 術 員	—	—	0.27	0.27人	
墳 墓 C	10 m ²	7画地程度	主任技師	—	—	0.05	0.05人	
			技師 A	0.36	0.08	0.06	0.50人	
			技師 B	0.36	0.65	0.78	1.79人	
			技師 C	0.36	0.21	—	0.57人	
			技 術 員	—	—	0.38	0.38人	
墳 墓 D	10 m ²	3～5基 (画地) 程度	主任技師	—	—	0.05	0.05人	
			技師 A	0.21	0.08	0.06	0.35人	
			技師 B	0.21	0.37	0.45	1.03人	
			技師 C	0.21	0.21	—	0.42人	
			技 術 員	—	—	0.22	0.22人	
墳 墓 E	10 m ²	7基 (画地) 程度	主任技師	—	—	0.05	0.05人	
			技師 A	0.36	0.08	0.06	0.50人	
			技師 B	0.36	0.65	0.78	1.79人	
			技師 C	0.36	0.26	—	0.62人	
			技 術 員	—	—	0.38	0.38人	

注1 墳墓の調査及び算定は、墓石、墓誌等、カロート、石積、囲障（生垣を含む。）、立竹木等について行うものとする。

注2 当該墳墓に埋葬されている霊位数の調査は、Ⅲ 権利調査 1 墓地管理者等の調査で行うものとする。

7 建物等の残地移転要件の該当性の検討

工場、店舗、営業所、ドライブイン、コンビニエンスストア、パチンコ店、ガソリンスタンド、ゴルフ練習場等の大規模なもの（以下、VI 移転工法案の検討までにおいて「大規模工場等」という。）以外の建物等の残地移転要件の該当性の検討に必要となる、現況の敷地における建物等の位置関係、敷地利用の状況等の詳細な現地調査及び権利者等からの聞き取り調査を行ったうえで、残地が通常妥当と認められる移転先であるかの検討を行い、有形的・機能的・法制的に有効な移転想定配置図及び有形的・機能的・法制的に検討を行った資料（検討概要書）を作成する（VI 移転工法案の検討 に該当するものを除く。）ものであり、これに要する直接人件費の積算は、表2-34により行うものとする。

表2-34

区 分	単 位	職 種	外 業	内 業		計	備 考
			調 査	図面等	算 定		
建物等の残地移転要件の該当性の検討	権利者	技師 A	0.24	0.41	—	0.65人	
		技師 B	0.24	0.32	—	0.56人	
		技師 C	0.24	0.67	—	0.91人	
		技術員	—	0.19	—	0.19人	

注1 建物以外の植栽、自動車の保管場所等のみが支障となり、残地がそれらの通常妥当と認められる移転先であるかの検討を行う必要がある場合においても、本表を適用することができるものとし、検討結果に基づき、直接支障とならない建物等の調査が必要と判断された場合には、別途建物等の調査を実施するものとする。

注2 駐車場等の使用実態調査を時間毎などに複数回（2回以上）行う必要がある業種については、表6-5を加算することができるものとする。

8 照応建物の設計案の作成等

「7 建物等の残地移転要件の該当性の検討」により、残地において照応建物による建物の再現が可能であることを確認したうえで、経済的検討を行う（照応建物に係る建物の推定建築費の積算は策定した建物計画図に基づき概算額により行い、照応建物の補償総額と構外再築工法の補償総額との比較を行う）ものである。

(1) 建物計画案の策定

照応建物に係る建物の推定建築費の積算に必要な建物計画案を策定するものであり、これに要する直接人件費の積算は、表2-35により行うものとする。

表2-35

区 分	単 位	職 種	外 業	内 業		計	備 考
			調 査	図面等	算 定		
建物計画案の策定	設計案 1 案 当たり	技師 A	—	0.13	—	0.13人	
		技師 B	—	0.37	—	0.37人	

注 概算額による照応建物の推定建築費の積算を必要としない場合の照応建物の詳細設計（照応建物の補償額算定）を行う場合においても、表2-35を適用するものとする。

(2) 照応建物の設計案の作成

概算額による照応建物の推定建築費の積算に要する直接人件費の積算は、表2-36により行うものとする。

なお、照応建物によることが妥当と判断された場合における照応建物の詳細設計（照応建物の補償額算定）は、II 建物等の調査 4 建物の調査の調査内業（図面等）及び算定により行うものとする。

ただし、当該照応建物の詳細設計が、用途の異なる複数棟の建物を集約化（立体化を含む）することにより構造が複雑となる場合などは、VI 移転工法案の検討 6 照応建物の詳細設計等を適用することができるものとする。

表2-36

区 分	単 位	職 種	外 業	内 業		計	備 考
			調 査	図面等	算 定		
照応建物の設計案 の作成	設計案 1 案 当たり	技師 A	—	0.06	0.14	0.20人	
		技師 B	—	0.72	0.46	1.18人	
		技師 C	—	0.41	—	0.41人	
		技術員	—	—	0.10	0.10人	

注 概算額による照応建物の推定建築費の積算を必要としない場合における照応建物の詳細設計（照応建物の補償額算定）は、II 建物等の調査 4 建物の調査の調査内業（図面等）及び算定により行うものとし、当該照応建物の詳細設計が、用途の異なる複数棟の建物を集約化（立体化を含む）することにより構造が複雑となる場合などは、VI 移転工法案の検討 6 照応建物の詳細設計等を適用することができるものとする。

Ⅲ 権利調査

1 墓地管理者等の調査

(1) 打合せ協議

中間打合せは計上しないことを標準とするが、必要に応じて打合せ回数を計上する。

(2) 墓地管理者等の調査

墓地管理者等の調査には、墓地管理者、墓地使用（祭祀）者及び過去帳の調査を含むものとし、これに要する直接人件費の積算は、表3-1により行うものとする。

表3-1

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
墓地管理者 等 調 査	使用者 (施主)	—	主任技師	—	0.02	—	0.02 人	
			技師 B	0.39	0.03	—	0.42 人	
			技師 C	0.39	0.19	—	0.58 人	

2 土地利用履歴等調査

(1) 打合せ協議

中間打合せの回数は、第1段階調査後の1回、第2段階調査を実施した場合は2回を標準とし、必要に応じて打合せ回数を増減する。

(2) 法令関係資料の調査

法令関係資料の調査は、土壌汚染対策法等に基づく各種届出書類等を閲覧により調査するものであり、これに要する直接人件費の積算は、表3-2により行うものとする。

表3-2

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
法令関係資料 の調査	10,000 m ²	—	技師 A	1.07	—	—	1.07 人	
			技師 B	1.07	0.69	—	1.76 人	
			技師 C	—	0.69	—	0.69 人	

注 調査区域の地域によって表3-3の変化率表を適用するものとする。

表3-3

地 域	大市街地	市街地甲	市街地乙	都市近郊	耕地・森林	原 野
変化率	+1.00	+0.80	+0.50	+0.30	0	-0.30

注 変化率の積算は、第1編測量業務 第1章第1節1-4-2変化率の積算を適用する。

(3) 現況利用調査

現況利用調査は、土地の現況や土壌が汚染される可能性が高い用途に供されているか等を確認するものであり、これに要する直接人件費の積算は、表3-4により行うものとする。

表3-4

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備考
				調 査	図面等	算 定		
現況利用調査	10,000 m ²	—	技師 A	0.55	—	—	0.55 人	
			技師 B	0.55	0.59	—	1.14 人	
			技師 C	0.55	0.59	—	1.14 人	

注 調査区域の地域によって表3-3の変化率表を適用するものとする。

(4) 聞き取り等調査（自治体）

聞き取り等調査（自治体）は、都道府県又は土壌汚染対策法施行令（平成14年政令第336号）第8条に規定する市の環境部局及び地元自治体に対して、土壌汚染等に関する情報について聞き取り等調査を行うものであり、これに要する直接人件費の積算は、表3-5により行うものとする。

表3-5

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備考
				調 査	図面等	算 定		
聞き取り等調査（自治体）	機関	—	技師 A	0.38	—	—	0.38 人	
			技師 B	0.38	0.46	—	0.84 人	
			技師 C	0.38	0.46	—	0.84 人	

(5) 登記履歴調査・住宅地図等調査

登記履歴調査・住宅地図等調査は、過去に遡り土地の所有者等や工場の業種等を登記記録、住宅地図・航空写真等により調査するものであり、これに要する直接人件費の積算は、表3-6により行うものとする。

表3-6

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備考
				調 査	図面等	算 定		
登記履歴調査・住宅地図等調査	10,000 m ²	—	技師 B	1.27	0.82	—	2.09 人	
			技師 C	1.27	0.82	—	2.09 人	

注 調査区域の地域によって表3-3の変化率表を適用するものとする。

(6) 地形図等調査

地形図等調査は、旧版地形図等により、土地の形質変更の状況を調査するものであり、これに要する直接人件費の積算は、表3-7により行うものとする。

表3-7

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
地形図等調査	10,000 m ²	—	技師 B	0.77	—	—	0.77 人	
			技師 C	0.77	1.20	—	1.97 人	

注 調査区域の地域によって表3-3の変化率表を適用するものとする。

(7) 聞き取り調査（地元精通者等）

聞き取り調査（地元精通者等）は、地元精通者等に対して、土壌汚染等に関する情報について聞き取り調査を行うものであり、これに要する直接人件費の積算は、表3-8により行うものとする。

表3-8

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
聞き取り調査 (地元精通者 等)	10,000 m ²	—	技師 A	0.86	—	—	0.86 人	
			技師 B	0.86	0.59	—	1.45 人	
			技師 C	—	0.59	—	0.59 人	

注 調査区域の地域によって表3-3の変化率表を適用するものとする。

(8) 報告書作成

報告書は、調査を行った結果を報告書様式及び図面等により作成するものであり、これに要する直接人件費の積算は、表3-9により行うものとする。

表3-9

種 目	単 位	規 模	職 種	内 業	備 考
報告書作成	業 務	—	主任技師	0.45 人	
			技師 A	0.65 人	
			技師 B	1.01 人	
			技師 C	1.14 人	

IV 営業その他の調査

1 営業その他の区分

営業その他の調査は、表4-1の区分によって行うものとする。

表4-1

区 分
営業に関する調査及び算定
居住者に関する調査
動産に関する調査及び算定
その他通損に関する算定

2 打合せ協議

中間打合せの回数は、2回を標準とし、必要に応じて打合せ回数を増減する。

3 現地踏査

現地踏査の費用内容及び取扱いは、II 建物等の調査 3 現地踏査 に準ずるものとし、これに要する直接人件費の積算は、表4-2により行うものとする。

なお、現地踏査は、営業に関する調査及び算定を行うものにも適用する。

表4-2

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	備 考
現地踏査	業 務	—	技師 A	0.26人	
			技師 B	0.26人	

4 営業に関する調査及び算定

営業に関する調査及び算定の直接人件費の積算は、表4-3により行うものとする。

ただし、営業の内容等の難易度によって表4-4の補正を行うものとする。

表4-3

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
営 業	事業所 (企業)	—	技師 A	0.57	0.94	0.60	2.11人	
			技師 B	0.57	1.43	1.61	3.61人	
			技師 C	0.57	3.92	—	4.49人	
			技 術 員	—	—	0.45	0.45人	

注 事業所（企業）とは、土地等の取得等の対象となる敷地を使用して営業を行っている者をいう。

表4-4

難易区分	営業A	営業B	営業C	営業D	営業E
補正率	0.80	1.00	1.40	1.80	3.00

注 ・営業Aとは、個人事業（白色申告又は青色申告）で1営業所かつ1業種のもの。
 ・営業Bとは、法人で、1事業所かつ1業種のもの。
 ・営業Cとは、個人事業（白色申告又は青色申告）で、営業所・業種のいずれかが複数のもの、又はいずれも複数のもの。
 ・営業Dとは、法人で、営業所・業種のいずれかが複数のもの。
 ・営業Eとは、法人で、営業所・業種のいずれも複数のもの。
 なお、法人で営業所・業種が複数のもので、決算書等の分析が極めて困難と認められるものについては、別途見積等を徴収して対応するものとする。

5 仮営業所設置工事費用の調査及び算定

仮営業所の設置については、プレハブリース建物で仮営業する場合と賃貸物件によって仮営業する場合の2区分とし、これに要する直接人件費の積算は、表4-5により行うものとする。

表4-5

区分	単位	規模	職種	外業	内業		計	備考
				調査	図面等	算定		
仮営業所設置 プレハブリース	事業所	—	技師 A	—	0.12	0.06	0.18人	
			技師 B	0.33	0.87	0.56	1.76人	
			技師 C	0.33	0.25	—	0.58人	
仮営業所設置 賃貸物件	事業所	—	技師 A	—	0.12	0.06	0.18人	
			技師 B	0.50	0.25	0.31	1.06人	
			技師 C	0.50	0.50	—	1.00人	

6 居住者に関する調査

居住者に関する調査の直接人件費の積算は、表4-6により行うものとする。

表4-6

区分	単位	規模	職種	外業	内業		計	備考
				調査	図面等	算定		
居住者調査	世帯	—	技師 A	—	0.02	—	0.02人	
			技師 B	0.05	—	—	0.05人	
			技師 C	0.05	0.05	—	0.10人	

7 動産に関する調査及び算定

動産に関する調査及び算定の直接人件費の積算は、表4-7により行うものとする。

表4-7

区分	単位	規模	職種	外業	内業		計	備考
				調査	図面等	算定		
一般住家	戸 (世帯)	—	技師 A	—	—	0.04	0.04人	
			技師 B	0.20	0.06	0.05	0.31人	
			技師 C	0.20	0.12	0.09	0.41人	
			技術員	—	—	0.09	0.09人	
農家住家	戸	—	技師 A	—	—	0.03	0.03人	
			技師 B	0.45	0.05	0.06	0.56人	
			技師 C	0.45	0.24	0.12	0.81人	
			技術員	—	—	0.10	0.10人	
店舗	店舗	50㎡以上 150㎡未満	技師 A	—	—	0.03	0.03人	
			技師 B	0.26	0.05	0.04	0.35人	
			技師 C	0.26	0.18	0.13	0.57人	
			技術員	—	—	0.09	0.09人	
事務所	事業所	50㎡以上 150㎡未満	技師 A	—	—	0.03	0.03人	
			技師 B	0.17	0.04	0.04	0.25人	
			技師 C	0.17	0.11	0.10	0.38人	
			技術員	—	—	0.07	0.07人	
工場	事業所	50㎡以上 150㎡未満	技師 A	—	—	0.02	0.02人	
			技師 B	0.08	0.05	0.03	0.16人	
			技師 C	0.08	0.10	0.07	0.25人	
			技術員	—	—	0.03	0.03人	
倉庫	事業所	50㎡以上 150㎡未満	技師 A	—	—	0.02	0.02人	
			技師 B	0.13	0.04	0.03	0.20人	
			技師 C	0.13	0.12	0.06	0.31人	
			技術員	—	—	0.06	0.06人	

注 区分が店舗、事務所、工場及び倉庫で、本表の規模欄に定める面積以外の場合は、表4-8の補正率表を適用するものとする。

表4-8

床面積	50 m ² 未満	50 m ² 以上 150 m ² 未満	150 m ² 以上 350 m ² 未満	350 m ² 以上 600 m ² 未満	600 m ² 以上 1,000 m ² 未満
補正率	0.80	1.00	1.80	2.80	4.00

1,000 m ² 以上 1,500 m ² 未満	1,500 m ² 以上 2,000 m ² 未満	2,000 m ² 以上 3,000 m ² 未満	3,000 m ² 以上 5,000 m ² 未満	5,000 m ² 以上 7,000 m ² 未満
5.40	6.90	8.70	12.00	15.90

8 その他通損に関する算定

その他通損に関する算定の直接人件費の積算は、表4-9により行うものとする。

表4-9

区分	単位	規模	職種	外業	内業		計	備考
				調査	図面等	算定		
仮住居又は 借家人補償	世帯	—	技師 A	—	—	0.02	0.02人	補償額算定
			技師 B	—	—	0.05	0.05人	
			技師 C	—	—	0.13	0.13人	
移転雑費	所有者 又は 世帯	—	技師 A	—	—	0.04	0.04人	補償額算定
			技師 B	—	—	0.06	0.06人	
			技師 C	—	—	0.52	0.52人	

V 予備調査

予備調査は、大規模工場等の敷地（土地）の一部が取得等の対象となる場合において、現状の機能を構内（残地）において回復させることの検討が必要であると認められるときに、当該大規模工場等の使用実態、建物等の影響の範囲及び想定される移転計画（レイアウト）の概略を予め把握するために行う調査とする。

なお、本調査を行った建物等（機械設備、生産設備及び附帯工作物）について、II 建物等の調査 に当たって次の点に留意すること。

（留意点） 建物等の調査のうち、建物、機械設備、生産設備及び附帯工作物については、予備調査の調査結果を貸与させるものとし、歩掛（調査外業、調査内業（図面等））を70パーセントに補正するものとする。

1 打合せ協議

中間打合せの回数は、1回を標準とし、必要に応じて打合せ回数を増減する。

2 現地踏査

現地踏査の費用内容及び取扱いは、II 建物等の調査 3 現地踏査 に準ずるものとし、これに要する直接人件費の積算は、表5-1により行うものとする。

表5-1

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	備 考
現地踏査	業 務 (権利者)	—	主任技師	1.08 人	
			技師 A	1.08 人	
			技師 B	1.08 人	

注 本表単位欄の業務は、原則として、大規模工場等1権利者を1発注で行うものとする。

3 企業の内容等の調査

企業の内容等の調査は、移転工法の検討に当たって重要な要素となる事項で、主として次の項目について調査を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表5-2により行うものとする。

- (1) 所在地、名称及び代表者名
- (2) 業種及び製造（加工）品目
- (3) 所有者又は占有者の組織及び他大規模工場等を有している場合には、他大規模工場等と当該大規模工場等との関係
- (4) 財務状況
- (5) 主たる原料及び製品の価格並びに販売（得意）先
- (6) 製品等の製造（加工）工程又は商品等の流れ（図式化したもの）
- (7) 移転工法の検討に当たって関係する法令とその内容
- (8) その他移転工法の検討に必要と認められる事項

表5-2

種 目	単 位	職 種	外 業	内 業	計	備 考
企業内容等の 調査	事業所 (企業)	技師 A	0.81	—	0.81人	
		技師 B	0.81	0.54	1.35人	
		技師 C	0.81	1.08	1.89人	

注 事業所（企業）とは、土地等の取得等の対象となる敷地を使用して営業を行っている者をいう。

4 敷地使用実態の調査

敷地使用実態の調査とは、敷地面積、土地の取得等の範囲及び面積、用途地域等及び公法上の規制、工場立地法に基づく緑地の位置及び面積、敷地内に存する各建物の位置、構造、階数等、機械設備、生産設備、附帯工作物並びに敷地の使用実態（駐車場等の位置及び収容台数、原材料、製品等の置場及び品目数量、その他）等を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表5-3により行うものとする。

なお、発注者から現況平面図の支給又は権利者が所有している敷地の配置図等の提供を受けることが困難であって、当該敷地の配置図を平板測量等によって作成する必要があると認められる場合には、別途その費用を計上することができるものとする。

表5-3

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
敷地全体の 配置	事業所	300 m ² 以上 500 m ² 未満	技師 A	0.32	0.03	0.03	0.38人	
			技師 B	0.32	0.48	0.19	0.99人	
			技師 C	0.32	0.14	0.06	0.52人	
			技 術 員	—	—	0.06	0.06人	

注 本表規模欄の面積は、当該権利者が使用している敷地の全部を指すものではなく、土地の取得等によって移転工法上必要と認められる面積をいう。なお、本表規模欄に定める面積以外の場合には、表5-4の補正率表を適用するものとする。

表5-4

敷地面積	300 m ² 未満	300 m ² 以上 500 m ² 未満	500 m ² 以上 800 m ² 未満	800 m ² 以上 1,300 m ² 未満
補正率	0.80	1.00	1.30	1.90

1,300 m ² 以上 2,000 m ² 未満	2,000 m ² 以上 3,000 m ² 未満	3,000 m ² 以上 5,000 m ² 未満	5,000 m ² 以上 7,000 m ² 未満
2.60	3.40	4.70	6.20

7,000 m ² 以上 10,000 m ² 未満	10,000 m ² 以上 15,000 m ² 未満	15,000 m ² 以上 25,000 m ² 未満	25,000 m ² 以上 35,000 m ² 未満
7.80	10.20	14.00	18.40

5 建物調査

建物調査は、間取平面、建築設備、構造概要、立面等、推定再建築費の概算額の算定及び移転計画の作成に必要な概要調査を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表5-5により行うものとする。

表5-5

区分	単位	規模	職種	外業	内業		計	備考
				調査	図面等	算定		
建物	棟	200 m ² 以上 400 m ² 未満	主任技師	0.45	0.06	0.06	0.57人	
			技師 A	0.45	0.62	—	1.07人	
			技師 B	0.45	0.62	0.28	1.35人	
			技師 C	—	0.03	0.28	0.31人	
			技術員	—	—	0.08	0.08人	

注1 建物は、木造、非木造の区分を行わないものとする。

注2 本表規模欄に定める建物延べ面積以外の建物は、表5-6の補正率表を適用するものとする。

表5-6

建物延面積	200 m ² 未満	200 m ² 以上 400 m ² 未満	400 m ² 以上 600 m ² 未満	600 m ² 以上 1,000 m ² 未満	1,000 m ² 以上 1,500 m ² 未満
補正率	0.80	1.00	1.40	1.90	2.60

1,500 m ² 以上 2,000 m ² 未満	2,000 m ² 以上 3,000 m ² 未満	3,000 m ² 以上 4,000 m ² 未満	4,000 m ² 以上 5,000 m ² 未満
3. 20	4. 10	5. 20	6. 20

5,000 m ² 以上 7,000 m ² 未満	7,000 m ² 以上 10,000 m ² 未満	10,000 m ² 以上 15,000 m ² 未満	15,000 m ² 以上 21,000 m ² 未満
7. 50	9. 50	12. 30	15. 90

6 機械設備等調査

機械設備等（生産設備、附帯工作物を含む。）の調査は、配置、機械名（種類）、規格等、再築費又は復元の概算額の算定及び、移転計画の作成に必要な概要の調査を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表5-7により行うものとする。

表5-7

区分	単位	規模	職種	外業	内業		計	備考
				調査	図面等	算定		
機械設備等	事業所	400 m ² 以上 600 m ² 未満	主任技師	1.02	0.33	0.16	1.51人	
			技師 A	1.02	0.66	0.66	2.34人	
			技師 B	1.02	1.30	0.21	2.53人	
			技術員	—	—	0.33	0.33人	

注 本表規模欄の面積は、当該権利者に係る屋内、屋外にあって、機械設備、生産設備等の設置面積とし、本表規模欄に定める面積以外の場合は、表5-8の補正率表を適用するものとする。

表5-8

機械設備の 面積	200 m ² 以上 400 m ² 未満	400 m ² 以上 600 m ² 未満	600 m ² 以上 1,000 m ² 未満	1,000 m ² 以上 1,500 m ² 未満
補正率	0. 80	1. 00	1. 30	1. 80

1,500 m ² 以上 2,000 m ² 未満	2,000 m ² 以上 3,000 m ² 未満	3,000 m ² 以上 5,000 m ² 未満	5,000 m ² 以上 8,000 m ² 未満
2.30	2.90	4.00	5.60

8,000 m ² 以上 12,000 m ² 未満	12,000 m ² 以上 20,000 m ² 未満	20,000 m ² 以上 30,000 m ² 未満	30,000 m ² 以上 40,000 m ² 未満
7.50	10.40	14.00	17.60

7 移転計画案の作成

移転計画案の作成の費用は、公共用地の取得に伴う損失補償基準（以下「基準」という。）及び公共用地の取得に伴う損失補償基準の運用方針（以下「運用方針」という。）の定めるところにより、現状の機能を構内（残地）において回復される移転計画案2～3案の作成として、主として次の作業を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表5-9によるものとする。

- (1) 製品等の製造（加工）工程又は商品等の流れ
- (2) 建物（関連移転を必要と認められるものを含む）、機械設備等の移転計画
- (3) 照応建物に係る建物の構造、規模、階数等の概要
- (4) 建物、機械設備等の移転工程表
- (5) 移転計画案検討概要書
- (6) 移転計画各案の比較表

表5-9

種目	単位	規模	職種	内業	備考
移転計画案の作成	事業所	300 m ² 以上 500 m ² 未満	主任技師	1.29人	
			技師 A	1.29人	
			技師 B	1.29人	
			技師 C	1.52人	

注1 敷地面積は、事業用地として取得等を行う面積を含めた移転計画案の概略の作成に想定される面積とする。

注2 本表規模欄の面積以外の場合は、表5-10の補正率表を適用するものとする。

表 5-10

敷地面積	300 m ² 未満	300 m ² 以上 500 m ² 未満	500 m ² 以上 800 m ² 未満	800 m ² 以上 1,300 m ² 未満	1,300 m ² 以上 2,000 m ² 未満
補正率	0.80	1.00	1.30	1.90	2.60

2,000 m ² 以上 3,000 m ² 未満	3,000 m ² 以上 5,000 m ² 未満	5,000 m ² 以上 7,000 m ² 未満	7,000 m ² 以上 10,000 m ² 未満
3.40	4.70	6.20	7.80

10,000 m ² 以上 15,000 m ² 未満	15,000 m ² 以上 25,000 m ² 未満	25,000 m ² 以上 35,000 m ² 未満
10.20	14.00	18.40

VI 移転工法案の検討

当移転工法案の検討は、大規模工場等で当該敷地（土地）の一部が取得等の対象となる場合において、当該大規模工場等の企業内容及び敷地使用実態などを調査したうえで、現状の機能を構内（残地）において回復させる移転工法案の作成を行うものとする。

1 打合せ協議

中間打合せの回数は、2回を標準とし、必要に応じて打合せ回数を増減する。

2 関係資料収集

関係資料収集に要する直接人件費の積算は、表6-1により行うものとする。

ただし、複数の権利者の移転工法案の検討を1業務として発注する場合は、その権利者数によって表6-1の歩掛に表6-2の補正を行うものとする。

（参考） 1業務の直接人件費 = (単位当たり単価 × 補正率 × 権利者数)

表6-1

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	備 考
関係資料収集	権利者	—	技師 B	1.62人	

表6-2

権 利 者 数	補 正 率
3未満	1.00
3以上～5未満	0.90
5以上～10未満	0.80
10以上	0.70

3 企業内容等の把握（調査）

企業内容の調査は、移転工法検討に当たって、主として次の項目について調査を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表6-3により行うものとする。

ただし、本業務費の積算に当たっては、当該権利者（大規模工場等）について V 予備調査 を行っているもの、又は IV 営業その他の調査 を行っているものについては、原則として、本業務に係る費用は計上しないものとする。

- (1) 所在地、名称及び代表者名
- (2) 業種及び製造（加工）品目
- (3) 所有者又は占有者の組織および他大規模工場等を有している場合には、他大規模工場等と当該大規模工場等との関係
- (4) 財務状況
- (5) 主たる原料および製品の価格並びに販売（得意）先
- (6) 製品等の製造（加工）工程又は商品の流れ（図式化したもの）
- (7) 移転工法の検討に当たって関係する法令とその内容

(8) その他移転工法の検討に必要と認められる事項

表6-3

種 目	単 位	職 種	外 業	内 業	計	備 考
企業内容等の調査	事業所 (企業)	技師 A	0.81	—	0.81	
		技師 B	0.81	0.54	1.35	
		技師 C	0.81	1.08	1.89	

注 事業所（企業）とは、土地等の取得等の対象となる敷地を使用し営業を行っている者をいう。

4 敷地の使用実態の調査

敷地の使用実態の調査は、大規模工場等の移転工法案の検討に先立ち、建物等の調査書等を基に当該敷地の使用実態（敷地面積、土地の取得等の範囲及び面積、用途地域等及び公法上の規制、工場立地法等に基づく緑地の位置及び面積、駐車場等の位置及び収容台数、原材料、製品等の置場及び品目数量、その他）の調査を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表6-4によるものとする。ただし、当該権利者（大規模工場等）の V 予備調査 を行ったものについては、原則として、本業務に係る費用は計上しないものとする。なお、予備調査の資料を基に確認の調査が必要と認めるときは、本歩掛を30パーセントに補正するものとする。

また、駐車場等の使用実態調査を時間毎などに複数回（2回以上）行う必要がある場合に要する直接人件費については、表6-5により加算することができるものとする。

表6-4

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
敷地の使用実態の調査	権利者	敷地面積	技師 A	0.23	—	0.23人	
		300 m ² 以上	技師 B	0.23	0.08	0.31人	
		500 m ² 未満	技師 C	0.23	0.08	0.31人	

注1 敷地面積は、大規模工場等の敷地面積とする。

注2 敷地面積が本表規模欄に定める面積以外の場合は、表6-6の補正率表を適用するものとする。

表6-5

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
駐車場等の使用実態 追加調査	1 回 当たり	敷地面積	技師 A	0.06	—	0.06人	
		300 m ² 以上	技師 B	0.06	0.02	0.08人	
		500 m ² 未満	技師 C	0.06	0.02	0.08人	

注1 本表は、予備調査の資料を基に確認の調査を行う場合に適用する表6-4を30パーセントに補正したものである。

注2 敷地面積が本表規模欄に定める面積以外の場合は、表6-6の補正率表を適用するものとする。

表6-6

敷地面積	300 m ² 未満	300 m ² 以上 500 m ² 未満	500 m ² 以上 800 m ² 未満	800 m ² 以上 1,300 m ² 未満
補正率	0.80	1.00	1.30	1.90

1,300 m ² 以上 2,000 m ² 未満	2,000 m ² 以上 3,000 m ² 未満	3,000 m ² 以上 5,000 m ² 未満	5,000 m ² 以上 7,000 m ² 未満
2.60	3.40	4.70	6.20

7,000 m ² 以上 10,000 m ² 未満	10,000 m ² 以上 15,000 m ² 未満	15,000 m ² 以上 25,000 m ² 未満	25,000 m ² 以上 35,000 m ² 未満
7.80	10.20	14.00	18.40

5 移転工法案の作成

移転工法案の作成は、基準及び運用方針の定めるところにより、現状の機能を構内（残地）において回復させる残地内工法の移転工法案2～3案を作成したうえで、経済的検討を行う（照応建物の推定建築費の算定は概算額で行い、補償総額の比較を行う）ものであり、これに要する直接人件費の積算は、表6-7によるものとする。

ただし、V 予備調査 を行っているものについては、原則として、本業務に係る費用は計上しないものとする。

なお、予備調査の資料を基に確認の調査が必要と認めたときは、本歩掛を50パーセントに補正するものとする。

この検討により移転工法を決定した後の照応建物に係る補償額の算定は、6 照応建物の詳細設計等により行うものとする。

表6-7

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
移転工法案の作成	権利者	敷地面積 300 m ² 以上 500 m ² 未満	主任技師	—	1.89	1.89人	
			技師 A	—	1.89	1.89人	
			技師 B	—	1.89	1.89人	
			技師 C	—	2.22	2.22人	

注1 敷地面積は、事業用地として取得等を行う面積を含めた移転工法案作成に想定される範囲の面積とする。

注2 敷地面積が本表規模欄に定める面積以外の場合は、表6-8の補正率表を適用するものとする。

表6-8

敷地面積	300 m ² 未満	300 m ² 以上 500 m ² 未満	500 m ² 以上 800 m ² 未満	800 m ² 以上 1,300 m ² 未満
補正率	0.80	1.00	1.30	1.90

1,300 m ² 以上 2,000 m ² 未満	2,000 m ² 以上 3,000 m ² 未満	3,000 m ² 以上 5,000 m ² 未満	5,000 m ² 以上 7,000 m ² 未満
2.60	3.40	4.70	6.20

7,000 m ² 以上 10,000 m ² 未満	10,000 m ² 以上 15,000 m ² 未満	15,000 m ² 以上 25,000 m ² 未満	25,000 m ² 以上 35,000 m ² 未満
7.80	10.20	14.00	18.40

6 照応建物の詳細設計等

照応建物の詳細設計等は、照応建物による建物の設計及び算定等を行うものであり、これに要する直接人件費の積算は、次式により行うものとする。

なお、これにより難しい場合は、別途積算するものとする。

$$\text{照応建物の詳細設計費} = (\text{図面作成枚数}) \times (\text{図面作成費} \times \text{依頼度})$$

(図面作成費) : 建物の計画・設計・計算・算定及び査定検証に要する人件費

(1) 図面作成枚数

図面作成枚数は、照応建物の用途区分によって必要となる数量を認定するものとする。

この場合、照応建物の詳細設計1棟当たりの図面枚数は、照応建物の詳細設計延べ床面積×建物1㎡当たり図面枚数により算出した枚数を基準として別紙作成図面認定表により認定するものとする(建物1㎡当たり図面枚数は表6-9を標準とする)。という。)

なお、表6-9の建物面積1㎡当たり図面枚数は、工業標準化法(昭和24年法律第185号)第11条により制定された日本工業規格(以下「日本工業規格」という。)A列1番(以下「A1判」という。)を標準としたものである。日本工業規格A列2番(以下「A2判」という。)を使用する場合には、図面枚数を2倍にするものとする。

図面枚数表(建物面積1㎡当たり・A1判)

表6-9

用途区分 建物の 延べ面積	イ	ロ	ハ
200 m ² 未満	0.067	0.087	0.047

200㎡以上 400㎡未満	0.042	0.053	0.030
400㎡以上 600㎡未満	0.035	0.044	0.026
600㎡以上 1,000㎡未満	0.030	0.039	0.021
1,000㎡以上 1,500㎡未満	0.026	0.034	0.019
1,500㎡以上 2,000㎡未満	0.023	0.030	0.017
2,000㎡以上 3,000㎡未満	0.021	0.027	0.015
3,000㎡以上 4,000㎡未満	0.019	0.024	0.013
4,000㎡以上 5,000㎡未満	0.017	0.022	0.012
5,000㎡以上	0.016	0.020	0.011

注 用途区分：イとは、店舗・事務所・病院・学校・マンション・住宅・その他これに類するもの。
ロとは、劇場・映画館・公会堂・神社・仏閣・その他これに類するもの。
ハとは、工場・倉庫・車庫・体育館・その他これに類するもの。

(2) 図面作成費（1枚当たり）の直接人件費は、表6-10により行うものとする。

表6-10

種 目	職 種	単 位	A1判	A2判	備 考
図 面 作成費	技師 A	1 枚	3.10 人	1.55 人	
	技師 C	当 たり	1.50 人	0.75 人	

(3) 依頼度

設計上参考となる各種の資料（標準図、類似の仕様書、詳細図、計算例、その他）の提供あるいは、設計上の方針の指示等により設計者の負担が軽減できる場合は、表6-11の依頼度を乗じて設計費を低減する。

表6-11

提 供 す る 資 料 の 内 容	依 頼 度
資料を提供しない場合、又は提供する資料が極めて少ない場合	1.00～0.80
類似の参考例がかなりある場合	0.80～0.60

準拠すべき設計図書があり、その一部を修正する場合	0.60～0.40
--------------------------	-----------

作成図面認定表

図面名称		権利者				
一般図	表紙					
	配置・案内図					
	仕上表					
	平面図					
	立面図					
	屋根伏図					
	断面図					
	矩形図					
	詳細図					
	展開図					
	建具表					
構造図	基礎伏図					
	基礎詳細図					
	軸組図					
	梁伏図					
	構造詳細図					
	鉄骨・鉄筋図					
	柱・梁リスト					
設備図	電灯設備図					
	動力設備図					
	給・排ガス図					
	その他設備図					
その他関係図						
合計		枚	枚	枚	枚	枚

7 機械設備設計

構内（残地）に建物を集約して機能回復を図る場合の機械設備の設計は、決定レイアウト図に基づいて、従前機能が確保されるように再配置の検討を行い、これに必要な移転費用の算定までを行うものであり、この業務に要する直接人件費の積算は、次式によって行うものとする。

ただし、下水処理場設備、高圧ガス設備、変電設備等の特殊な設備で、この基準によりがたいと判断される場合には、別途資料で積算できるものとする。

なお、本項で示す以外の直接人件費積算上の要件等については、Ⅱ 建物等の調査 6 工作物等の調査 (1) 機械設備 の項に準ずるものとする。

$$\text{機械設備設計費} = \text{図面等費} + \text{算定費} + \text{見積徴収費}$$

(1) 図面等費

図面等費は、構内再配置による移転補償費を算定するための図面及び資料作成に要する費用で、機械設備の区分、規模に応じた技術者の所要員数と基準単価により算出するものとする。

$$\text{図面等費} = \text{技術者員数} \times \text{基準単価}$$

(2) 算定費

算定費は、調査設計資料に基づく移転補償費の算定業務に要する費用であり、機械設備の区分、規模に応じた技術者の所要員数と基準単価により算出するものとする。

$$\text{算定費} = \text{技術者員数} \times \text{基準単価}$$

(3) 見積徴収費

機械設備の再設費の算定に当たり、専門業者等から見積を徴収して採用する場合には、それにかかる費用を直接人件費として加算するものとする。

$$\text{見積徴収費} = \text{技術者員数} \times \text{基準単価}$$

(4) 標準技術者員数

機械設備設計に係る技術者の標準員数は、表6-12 及び表6-13 のとおりとし、生産設備の見積を徴収する場合の技術者の標準員数は、表6-14 のとおりとする。

機械設備設計標準員数

表6-12

区 分	単 位	規 模	職 種	内 業		計	備 考
				図面等	算 定		
機械設備A	事業所	設置面積 100 m ² 以上 200 m ² 未満	主任技師	0.14	0.40	0.54人	
			技師 A	0.75	0.40	1.15人	
			技師 B	0.93	—	0.93人	
			技 術 員	—	0.22	0.22人	
機械設備B	事業所	設置面積 400 m ² 以上 600 m ² 未満	主任技師	0.42	0.60	1.02人	
			技師 A	2.29	2.31	4.60人	
			技師 B	2.76	—	2.76人	
			技 術 員	—	0.63	0.63人	
機械設備C	事業所	設置面積 400 m ² 以上 600 m ² 未満	主任技師	0.42	0.60	1.02人	
			技師 A	2.87	2.89	5.76人	
			技師 B	3.45	—	3.45人	
			技 術 員	—	0.63	0.63人	
機械設備D	事業所	設置面積 400 m ² 以上 600 m ² 未満	主任技師	0.42	0.60	1.02人	
			技師 A	3.30	3.33	6.63人	
			技師 B	3.97	—	3.97人	
			技 術 員	—	0.63	0.63人	
機械設備E	事業所	設置面積 400 m ² 以上 600 m ² 未満	主任技師	0.42	0.60	1.02人	
			技師 A	3.73	3.76	7.49人	
			技師 B	4.49	—	4.49人	
			技 術 員	—	0.63	0.63人	

注1 本表の区分は、表2-15のとおりとする。

注2 設置面積は、決定レイアウトに基づく機械設備の設置面積とする。

注3 本表の数値は、規模、業務内容によって補正を行うものとする。

注4 本表の歩掛は、表2-16の調査内業（図面等）及び算定の合計の員数である。

見積徴収者員数

表6-13

区 分	単 位	職 種	外 業	内 業		計	備 考
			調 査	図面等	算 定		
機械設備の見積	台 (装置)	主任技師	0.14	—	0.43	0.57人	
		技師 A	0.14	0.91	0.14	1.19人	

注1 類似する機械設備が複数あるときは、それらについては1台（装置）当たりの歩掛を70パーセントに補正するものとする。

注2 現地調査を行うことが困難なときは、調査内業（図面等）の歩掛を100パーセントを超え150パーセント以下の範囲で補正することができる。

注3 本表の歩掛は、原則として2社の見積の徴収に要する費用を含んだ歩掛である。

注4 本表は、表2-18を再掲したものである

見積徴収技術者員数

表6-14

区 分	単 位	職 種	外 業	内 業		計	備 考
			調 査	図面等	算 定		
生産設備の見積	台 (設備)	主任技師	0.23	—	0.36	0.59人	
		技師 A	0.23	0.41	0.23	0.87人	

注1 類似する生産設備が複数あるときは、それらについては1台（設備）当たりの歩掛を70パーセントに補正するものとする。

注2 現地調査を行うことが困難なときは、調査内業（図面等）の歩掛を100パーセントを超え150パーセント以下の範囲で補正することができるものとする。

注3 本表は、原則として2社の見積の徴収に要する費用を含んだ歩掛である。

注4 本表は、表2-22を再掲したものである。

(5) 規模による員数の補正

表6-12に設定する員数は、業務の規模に応じて、それぞれ表6-15に示す数値を乗じて補正を行うものとする。

機械設備Aの場合

表6-15

機械設備 の面積	100 m ² 未満	100 m ² 以上 200 m ² 未満
補正率	0.80	1.00

機械設備A以外の場合

表6-15

機械設備 の面積	200 m ² 以上 400 m ² 未満	400 m ² 以上 600 m ² 未満	600 m ² 以上 1,000 m ² 未満	1,000 m ² 以上 1,500 m ² 未満
補正率	0.80	1.00	1.30	1.80

1,500 m ² 以上 2,000 m ² 未満	2,000 m ² 以上 3,000 m ² 未満	3,000 m ² 以上 5,000 m ² 未満	5,000 m ² 以上 8,000 m ² 未満
2.30	2.90	4.00	5.60

8,000 m ² 以上 12,000 m ² 未満	12,000 m ² 以上 20,000 m ² 未満	20,000 m ² 以上 30,000 m ² 未満	30,000 m ² 以上 40,000 m ² 未満
7.50	10.40	14.00	17.60

Ⅶ 再算定業務

再算定業務とは、当該年度以前に調査及び算定を行ったものについて、改めて補償額の算定を行うことをいい、調査及び算定時点から一定期間経過しているため再調査を行う必要があるもの、又は権利者より再調査の申出があり、やむを得ないものと認められたものを含むものとする。

1 打合せ協議

中間打合せは計上しないことを標準とするが、必要に応じて打合せ回数を計上する。

2 現地踏査

現地踏査の費用内容及び取扱いは、Ⅱ 建物等の調査 3 現地踏査 に準ずるものとし、これに要する直接人件費の積算は、表7-1により行うものとする。

表7-1

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	備 考
現地踏査	権利者	—	技師 A	0.13 人	
			技師 B	0.13 人	

注 再調査を伴う場合にのみ計上するものとする。

3 再算定業務（再調査不要）

再算定業務（再調査不要）は、原則として、移転工法及び補償額の算定方法の変更を行うことなく（ただし、基準、運用方針、調査算定要領等の改正に伴って、補償額の算定方法等に変更が生じたときは、これらの変更を含む）、当該年度の単価に修正して補償額の再算定を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、各業務区分の歩掛のうち、「内業（算定）」により行うものとする。

ただし、営業補償の再算定業務については、原則として、「4 再調査業務」（4）及び（5）により行うものとする。

4 再調査業務

再調査業務に要する直接人件費の積算は、次により行うものとし、特段の規定がない場合の再算定に関する考え方は、「3 再算定業務（再調査不要）」の規定によるものとする。

- (1) 建物等が新築されたときは、当該建物等についてのみ新たな調査を行うものとし、「Ⅱ 建物等の調査」の歩掛によるものとする。
- (2) 建物の改修若しくは補修が行われている場合又は基準、運用方針、調査算定要領等の改正に伴い建物等の一部を再調査する必要がある場合は、「Ⅱ 建物等の調査」歩掛のうち「調査外業」及び「調査内業（図面等）」を50パーセントに補正するものとする。
- (3) 建物の一部増築が行われている場合は、「Ⅱ 建物等の調査」歩掛のうち、調査内業（図面等）を50パーセントに補正するものとし、規模欄の面積は、一部増築が行われた部分を含む建物全体の面積とする。なお、調査外業の規模欄の面積は、増築部分のみの面積によるものとする。
- (4) 建物の改修又は補修が行われ、かつ、一部増築が行われている場合は、(2)及び(3)により求めた直接

人件費のいずれか高い方法によって積算するものとする。

- (5) 機械設備又は生産設備（附帯工作物を含む）の一部が新設又は新たな設備に設置替えされたときは、新設又は設置替えの規模等（再調査の対象となる面積）は新設又は設置替えを行った面積とする。
- (6) 営業補償（仮営業所の設置工事費用を除く）の対象となる事業所（企業）の会計年度が異なる場合は、再調査及び再算定（当初調査の成果を参考にして再調査を実施し、認定収益額等の補償対象金額を修正して補償額を算定することをいう）を行うものとする。

これに要する直接人件費の積算は、表7-2により行うものとし、営業の内容等の難易度によって、表4-4の補正を行うものとする。

ただし、当初調査時点と比較して当該事業所（企業）の業務内容が大幅に変化する等、本表によりがたい場合には、表4-3によることができるものとする。

なお、再調査及び再算定の対象となる会計年度が2カ年以上の場合は、表7-2の歩掛のうち、調査外業を110パーセントに補正するものとする。

表7-2

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
営 業（再 調 査・再算定）	事業所 （企業）	—	技師 A	0.16	0.94	0.60	1.70人	
			技師 B	0.32	0.95	1.61	2.88人	
			技師 C	0.16	3.44	—	3.60人	
			技 術 員	—	—	0.45	0.45人	

- (7) 営業補償（仮営業所設置工事費用）の算定の基礎となる仮営業所設置場所の賃料及び一時金の水準等が変動した場合は、再調査及び再算定（当初調査の成果を参考にして再調査を実施し、当該年度の価格に修正して補償額を算定することをいう）を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表7-3により行うものとする。

ただし、当初調査時点と比較して仮営業所の想定される設置場所又は設置方法等を変更する必要がある等、本表によりがたい場合には、表4-5によることができるものとする。

表7-3

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
仮営業所設置 プレハブリース （再調査・再算定）	事業所	—	技師 A	—	—	0.06	0.06人	
			技師 B	0.11	—	0.56	0.67人	
			技師 C	0.11	—	—	0.11人	
仮営業所設置 賃貸物件 （再調査・再算定）	事業所	—	技師 A	—	—	0.06	0.06人	
			技師 B	0.16	—	0.31	0.47人	
			技師 C	0.16	—	—	0.16人	

VIII 補償説明

補償説明とは、公共事業に必要となる土地等の取得等に伴う用地取得又は建物等の移転等の対象となる権利者に対し、土地の評価（残地補償を含む）の方法及び建物等の補償方針及び補償額の算定内容の説明を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表8-1及び8-2の区分によるものとする。

なお、この場合の歩掛は、受託者が2名以上の編成で行うことを前提としたものである。

表8-1

区 分	判 断 基 準
補償説明等 A	用地調査等共通仕様書第10章第122条（移転工法案の検討）の移転計画を行ったもの。または、これに準ずると認められるもの。
補償説明等 B	補償説明等A以外のもの。 ただし、表8-2の判断基準により区分を行うものとする。

表8-2

区 分	判 断 基 準
補償説明等 B-イ	(1) 土地のみのもの (2) 土地に囲障等の簡易な附帯工作物または立竹木が存するもの。 (3) 土地に土地所有者以外の者が所有する野立看板等が存するもの。ただし、この場合の権利者数は1名とする。
補償説明等 B-ロ	(1) 土地に機械設備、生産設備、庭園等が存するもの。 (2) 機械設備、生産設備等が存するもの。 (3) 居住の用に供されている借家人に係るもの。
補償説明等 B-ハ	(1) 土地、建物を所有している補償に係るもの。 (2) 居住用以外の用（住居用併用を含む。）に供している借家人に係るもの。
補償説明等 B-ニ	(1) 土地、建物を所有し、営業を行っている（住居併用を含む。）補償に係るもの。

注 補償説明等Bに係る直接人件費の積算に当たっては、表8-2による区分ごとの補正率は、表8-3により行うものとする。

表8-3

区 分	B-イ	B-ロ	B-ハ	B-ニ
補正率	0.50	0.80	1.00	1.30

1 打合せ協議

中間打合せの回数は、3回を標準とし、必要に応じて打合せ回数を増減する。

2 現地踏査

現地踏査の費用内容及び取扱いは、II 建物等の調査 3 現地踏査 に準ずるものとし、これに要する直接人件費の積算は、表8-4により行うものとする。

表8-4

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	備 考
現地踏査	業 務	—	主任技師	0.54人	
			技師 A	0.54人	
			技師 B	0.54人	

注 現地踏査は、表8-1の区分を行わないものとする。

3 概況ヒアリング等

概況ヒアリング等は、概況ヒアリング等及び補償対象となる権利者等と面接し補償説明を行うことについての協力依頼を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、補償説明等Aにあつては表8-5、補償説明等Bにあつては表8-6により行うものとする。

(補償説明等A)

表8-5

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
概況ヒアリング等	権利者	—	主任技師	0.27	0.39	0.66人	
			技師 A	0.54	0.81	1.35人	
			技師 C	0.27	0.39	0.66人	

注1 補償説明等Aは、主任技師1名、技師A2名、技師C1名の合計4名編成によって行うことを前提としたものであり、表8-5に表示する技師Aは2名分の人員である。(以下「補償説明等A」の歩掛について同じ。)

注2 直接人件費 = 単価 × 権利者数

(補償説明等B)

表8-6

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
概況ヒアリング等	権利者	B-ハ	主任技師	—	0.06	0.06人	
			技師 A	0.08	0.06	0.14人	
			技師 C	0.08	0.06	0.14人	

注1 補償説明等Bは、技師A1名、技師C1名の合計2名編成で行うことを前提としたものである。ただし、概況ヒアリングには主任技師が加わるものとする。

注2 本表の歩掛は、表8-2のB-ハを基準としたものであり、表8-2の区分によって表8-3の補正を行うものとする。

注3 直接人件費 = 表8-3の補正単価 × 表8-2の区分ごとの権利者数

4 説明資料の作成等

説明資料の作成等は、権利者ごとの処理方針の検討、補償内容等の確認、説明資料の作成等を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、補償説明等Aにあつては表8-7を、補償説明等Bにあつては表8-8により行うものとする。

(補償説明等A)

表8-7

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
説明資料等の作成	権利者	—	主任技師	—	0.54	0.54人	
			技師 A	—	2.97	2.97人	
			技師 C	—	2.28	2.28人	

注 直接人件費＝単価×権利者数

(補償説明等B)

表8-8

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
説明資料等の作成	権利者	B-ハ	主任技師	—	0.06	0.06人	
			技師 A	—	0.17	0.17人	
			技師 C	—	0.31	0.31人	

注1 本表の歩掛は、表8-2のB-ハを基準としたものであり、表8-2の区分によって表8-3の補正を行うものとする。

注2 直接人件費＝表8-3の補正単価×表8-2の区分ごとの権利者数

5 補償説明

補償説明は、土地、物件調書の配布、補償内容等の説明、記録簿の作成を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、補償説明等Aにあつては表8-9を、補償説明等Bにあつては表8-10により行うものとする。

(補償説明等A)

表8-9

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
補償説明	権利者	—	主任技師	5.40	0.81	6.21人	
			技師 A	10.97	1.62	12.59人	
			技師 C	5.57	2.43	8.00人	

注 直接人件費＝単価×権利者数

(補償説明等B)

表8-10

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
補償説明	権利者	B-ハ	主任技師	—	0.10	0.10人	
			技師 A	1.97	0.10	2.07人	
			技師 C	1.97	0.58	2.55人	

注1 本表の歩掛は、表8-2のB-ハを基準としたものであり、表8-2の区分によって表8-3の補正を行うものとする。

注2 直接人件費 = 表8-3の補正単価 × 表8-2の区分ごとの権利者数

IX 事業認定申請図書等の作成

[一] 事業認定申請図書等の作成

事業認定申請図書等の作成とは、土地収用法（昭和 26 年法律第 219 号。以下「法」という。）第 16 条に規定する事業の認定を受けることを前提として、法第 18 条の規定による事業認定申請書及び添付書類（関係機関への意見照会書類を含む。）並びにこれに関連する参考資料の作成とし、次の区分によるものとする。

① 相談用資料作成

起業者が事業認定機関に対する事前相談を行うための相談用資料（事業認定申請図書（案））の作成

② 申請図書作成

事業認定機関との事前相談の完了に伴う本申請図書の作成

① 相談用資料作成

起業者が事業認定機関に対して行う事前相談のための相談用資料作成を発注する場合には、次の各項目により行うものとする。

1 打合せ協議

中間打合せの回数は、3回を標準とし、必要に応じて打合せ回数を増減する。

2 現地踏査

現地踏査の費用内容及び取扱いは、II 建物等の調査 3 現地踏査 に準ずるものとし、これに要する直接人件費の積算は、表 9-1 により行うものとする。

表 9-1

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	備 考
現地踏査	業 務	—	主任技師	0.54 人	
			技師 A	0.54 人	
			技師 B	0.54 人	

3 現地調査等

現地調査等とは、相談用資料作成に必要な対象区間又は区域の調査等で、主として次の項目について行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表 9-2 により行うものとする。

なお、関連事業を含めて行う場合には、表 9-2 の歩掛を 100 パーセントを超え 130 パーセント以下の範囲で補正できるものとする。

- (1) 法第 4 条地等管理台帳調査
- (2) 法第 4 条地等物件調査
- (3) 土地面積の概数積算
- (4) 法第 4 条地面積等の積算
- (5) その他必要と認められる事項の調査及び整理、まとめ

表9-2

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
現地調査等	業 務	—	主任技師	1.08	—	1.08 人	
			技師 A	2.16	2.16	4.32 人	
			技師 B	2.16	2.16	4.32 人	

4 資料の収集及び作成

資料の収集及び作成とは、当該事業に係る資料の収集、整理並びに補足資料の作成で主として次の項目について行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表9-3により行うものとする。

なお、関連事業を含めて行う場合には、表9-3の歩掛を100パーセントを超え130パーセント以下の範囲で補正できるものとする。

- (1) 計画内容に係るもの
- (2) 公益性等に係るもの
- (3) 現状写真及び当該工事進捗状況に係るもの
- (4) その他の資料の収集及び作成

表9-3

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
資料の収集 及び作成	業 務	—	技師 A	3.24	1.62	4.86 人	
			技師 B	3.24	1.62	4.86 人	

5 調書等の作成

調書等の作成とは、相談用資料として、主として次の調書を作成するものとし、これに要する直接人件費の積算は、表9-4により行うものとする。

なお、関連事業を含めて行う場合には、表9-4の歩掛を100パーセントを超え130パーセント以下の範囲で補正できるものとする。

- (1) 事業認定申請書（案）等
- (2) 事業計画書
- (3) 関連事業に関する協議書（案）
- (4) 法第4条土地調査
- (5) 法第4条地等の管理者への意見照会書（案）

表9-4

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
調書等の作成	業 務	—	主任技師	—	3.28	3.28 人	
			技師 A	—	11.30	11.30 人	
			技師 B	—	11.30	11.30 人	

6 添付図面の作成

添付図面の作成は、次に掲げるものから必要と認められる図面を認定し、これに要する直接人件費の積算を行うものとし、この場合の積算は次式による。

なお、関連事業を含めて行う場合には、表9-5の歩掛を100パーセントを超え130パーセント以下の範囲で補正できるものとする。

添付図面作成の直接人件費＝（必要と認めた図面の種類数×添付図面作成費）

- (1) 起業地表示図
- (2) 法第4条地表示図
- (3) 関連事業表示図
- (4) 法第4条地管理者意見照会添付図
- (5) 起業地計画図等
- (6) 法令制限地表示図
- (7) 許認可等土地表示図
- (8) 参考資料として必要な図面
- (9) その他必要と認められる図面

表9-5

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
添付図面作成	種 類	—	技師 A	—	1.00	1.00 人	
			技 術 員	—	4.05	4.05 人	

注 図面作成は、同一種類の図面を、10枚（内部協議用を含む。）作成するものとし、成果物に至るまでに図面の作成を3回程度行うことを前提としている。

7 対象事業及び規模による補正

相談用資料作成の直接人件費の積算に当たっては、当該事業及び規模によって、表9-6の補正を行うものとする。この場合の対象項目は、3 現地調査等、4 資料の収集及び作成、5 調書等の作成 及び 6 添付図面の作成とする。

- (1) 道路、河川、鉄道、その他これらに類し、区間（線）を事業認定申請の対象とするもの。

なお、この区間は「起業地計画の区間」を原則とするが、必要に応じて「全体計画の区間」とすることができるものとする。

ただし、全体計画の区間で補正できる項目は、4 資料の収集及び作成 に限定するものとする。

表9-6

事業認定の対象となる距離	2.0km 未満	2.0km 以上 4.0km 未満	4.0km 以上 6.0km 未満	6.0km 以上 8.0km 未満	8.0km 以上 12.0km 未満
補正率	0.80	1.00	1.40	1.70	2.20

(2) ダム、飛行場、その他これらに類し区域（面）を事業認定申請の対象とするもの。

事業認定の対象となる面積	50ha 未満	50ha 以上 70ha 未満	70ha 以上 100ha 未満	100ha 以上 150ha 未満	150ha 以上 250ha 未満
補正率	2.40	3.00	3.70	4.90	6.70

(3) 学校、庁舎、その他これらに類し区域（面）を事業認定申請の対象とするもの。

事業認定の対象となる面積	3,000 m ² 未満	3,000 m ² 以上 5,000 m ² 未満	5,000 m ² 以上 10,000 m ² 未満	10,000 m ² 以上 15,000 m ² 未満	15,000 m ² 以上 25,000 m ² 未満
補正率	0.40	0.60	0.90	1.20	1.70

② 申請図書作成

事業認定機関との事前相談の完了に伴って、申請図書作成を別途発注する場合は、相談用資料の変更の程度によって、次の各項目について行うものとし、これに要する直接人件費の積算を行うものとする。

1 打合せ協議

中間打合せ回数は、1回を標準とし、必要に応じて打合せ回数を増減する。

2 現地踏査

相談用資料作成の表9-1の歩掛を50パーセントに補正するものとする。

3 現地調査等

相談用資料作成の表9-2の歩掛を30パーセント以上50パーセント以下の範囲で補正するものとする。

4 資料の収集及び作成

相談用資料作成の表9-3の歩掛を30パーセント以上50パーセント以下の範囲で補正するものとする。

5 調書等の作成

相談用資料作成の表9-4の歩掛を30パーセント以上50パーセント以下の範囲で補正するものとする。

6 添付図面の作成

相談用資料作成の表9-5の歩掛を70パーセント以上80パーセント以下の範囲で補正するものとする。

7 対象事業及び規模による補正

相談用資料作成と同様に取り扱うものとする。

8 関連事業の有無による補正

相談用資料作成と同様に取り扱うものとする。

[二] 裁決申請図書の作成

裁決申請図書の作成とは、法第40条に規定する裁決申請図書及びこれに関連する参考図書の作成をいい、次の各項目により行うものとする。

なお、本歩掛によりがたい案件の場合は、各項目を適宜補正又は別途見積等を徴収して対応することができるものとする。

1 打合せ協議

中間打合せの回数は、1回を標準とし、必要に応じて打合せ回数を増減する。

2 現地踏査

現地踏査の費用内容及び取扱いは、II 建物等の調査 3 現地踏査 に準ずるものとし、これに要する直接人件費の積算は、表9-7-1により行うものとする。

ただし、裁決申請の予定地に物件が存しない場合は、表9-7-2により行うものとする。

(裁決申請の予定地に物件が存する場合)

表9-7-1

種 目	単 位	職 種	外 業		
			A	B	C
現地踏査	件	主任技師	0.11人	0.04人	0.06人
		技師 A	0.11人	0.04人	0.06人
		技師 B	0.11人	0.04人	0.06人

注 上表A、B、Cは次のとおりである。

- A：裁決申請図書の作成と明渡裁決申立図書の作成を同時に委託する場合
- B：裁決申請図書の作成のみ委託する場合
- C：明渡裁決申立図書の作成のみ委託する場合

(裁決申請の予定地に物件が存しない場合)

表9-7-2

種 目	単 位	職 種	外 業		
			A	B	C
現地踏査	件	主任技師	0.04人	0.04人	—
		技師 A	0.04人	0.04人	—
		技師 B	0.04人	0.04人	—

注 上表A、B、Cは次のとおりである。

- A：裁決申請図書の作成と明渡裁決申立図書の作成を同時に委託する場合
- B：裁決申請図書の作成のみ委託する場合
- C：明渡裁決申立図書の作成のみ委託する場合

3 資料の整理・検討

資料の整理・検討とは、発注者から提供又は貸与される各種の調査等資料の内容を整理・検討して、裁決申請書(案)の作成に着手できるようにする作業をいい、直接人件費の積算は、表9-8により

行うものとする。

表9-8

種 目	単 位	職 種	外 業	内 業	計	備 考
資料の整理・検討	件	技師 A	—	0.85	0.85 人	
		技師 B	—	0.85	0.85 人	

4 裁決申請書（案）の作成

裁決申請書（案）の作成とは、法第40条に定める書類（図面の作成を除く）の作成をいい、主として次の項目について行うものとし、直接人件費の積算は、表9-9によるものとする。

- (1) 裁決申請書（案）本文の作成
- (2) 事業計画書の作成
- (3) 法第40条第1項第2号関係書類の作成（法施行規則第17条第2号イに定める証明書を含む）
- (4) 法第36条に定める土地調書（案）の作成

表9-9

種 目	単 位	職 種	外 業	内 業	計	備 考
裁決申請書（案）の作成	件	主任技師	—	0.27	0.27 人	
		技師 A	—	1.68	1.68 人	
		技師 B	—	1.68	1.68 人	

5 図面の作成

図面の作成とは、起業地の位置を表示する図面、起業地及び事業計画を表示する図面及び土地調書に添付する実測平面図の作成をいい、直接人件費の積算は、表9-10及び表9-11により行うものとする。

表9-10

種 目	単 位	職 種	外 業	内 業	計	備 考
起業地の位置を表示する図面及び 起業地及び事業計画を表示する図面	件	技師 A	—	0.04	0.04 人	
		技術員	—	1.56	1.56 人	

注 直接人件費の積算に当たっては、対象事業及び規模による補正を行うものとし、その補正率は、
[一] 事業認定申請図書の作成 ①相談用資料作成 7 対象事業及び規模による補正を適用するものとする。

表9-11

種 目	単 位	職 種	外 業	内 業	計	備 考
土地調書添付図面の作成	筆	技師 A	—	0.02	0.02 人	
		技術員	—	0.06	0.06 人	

6 その他参考図書の作成

その他参考図書の作成とは、裁決申請書（案）を補充する資料（協議経過説明書、登記事項証明書（写）等）の作成、編集、調整等をいい、直接人件費の積算は、表9-12により行うものとする。

表9-12

種 目	単 位	職 種	外 業	内 業	計	備 考
その他参考図書の作成	件	主任技師	—	0.06	0.06人	
		技師 A	—	0.44	0.44人	
		技師 B	—	0.44	0.44人	

[三] 明渡裁決申立図書の作成

明渡裁決申立図書の作成とは、法第47条の3に規定する明渡裁決申立図書及びこれに関連する参考資料の作成をいい、次の各項目により行うものとし、原則として〔二〕裁決申請図書の作成と併せて発注するものとする。

なお、本歩掛によりがたい案件の場合は、各項目を適宜補正又は別途見積等を徴して対応することができるものとする。

1 打合せ協議

中間打合せの回数は、1回を標準とし、必要に応じて打合せ回数を増減する。

2 現地踏査

現地踏査の直接人件費の積算は、表9-7-1又は表9-7-2により行うものとする。

3 資料の整理・検討

資料の整理・検討とは、発注者から提供又は貸与される各種の調査等資料の内容を整理・検討して明渡裁決申立書（案）の作成に着手できるようにする作業をいい、直接人件費の積算は、表9-13により行うものとする。

表9-13

種 目	単 位	職 種	外 業	内 業	計	備 考
資料の整理・検討	件	技師 A	—	0.42	0.42人	
		技師 B	—	0.42	0.42人	

注 物件が存しない場合は、当費用は計上しないものとする。

4 明渡裁決申立書（案）の作成

明渡裁決申立書（案）の作成とは、法第47条の3に定める書類（図面の作成を除く）の作成をいい、主として次の項目について行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表9-14により行うものとする。

ただし、物件が存しない場合は、表9-15により行うものとする。

(1) 明渡裁決申立書（案）本文の作成

(2) 法第47条の3第1項第1号関係書類の作成（法施行規則第17条の6第1項第1号に定める証明書を含む。）

(3) 法第36条に定める物件調書（案）の作成

（裁決申請の予定地に物件が存する場合）

表9-14

種 目	単 位	職 種	外 業	内 業	計	備 考
明渡裁決申立書（案） の作成	件	主任技師	—	0.31	0.31人	
		技師 A	—	1.84	1.84人	
		技師 B	—	1.84	1.84人	

（裁決申請の予定地に物件が存しない場合）

表9-15

種 目	単 位	職 種	外 業	内 業	計	備 考
明渡裁決申立書（案） の作成	件	主任技師	—	0.04	0.04人	
		技師 A	—	0.14	0.14人	
		技師 B	—	0.14	0.14人	

5 図面の作成

図面の作成とは、物件が存する場合に物件調書に添付する図面として、物件の種類に応じて建物平面図、建物、工作物、立竹木等の配置図等を作成することをいい、直接人件費の積算は、表9-16により行うものとする。

表9-16

種 目	単 位	職 種	外 業	内 業	計	備 考
図 面 の 作 成	件	主任技師	—	0.08	0.08人	
		技師 A	—	0.56	0.56人	
		技師 B	—	0.56	0.56人	

6 その他参考図書の作成

その他参考図書の作成とは、明渡裁決申立書（案）を補充する資料（協議経過説明書等）の作成、編集、調整等をいい、直接人件費の積算は、表9-17により行うものとする。

表9-17

種 目	単 位	職 種	外 業	内 業	計	備 考
その他参考図書の作成	件	主任技師	—	0.02	0.02人	
		技師 A	—	0.10	0.10人	
		技師 B	—	0.10	0.10人	

注 物件が存しない場合は、当費用は計上しないものとする。

X 消費税等調査

消費税等調査とは、土地等の権利者等の補償額の算定に当たり、消費税等の額の補償額への加算の要否又は消費税相当額の補償の要否の調査及び判定等を行うことをいう。

1 打合せ協議

中間打合せは計上しないことを標準とするが、必要に応じて打合せ回数を計上する。

2 消費税等調査

(1) 営業調査等を伴わない事業者

表10-1

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
消費税等調査	事業者	—	技師 A	0.15	0.09	—	0.24人	
			技師 B	0.15	0.13	—	0.28人	

(2) 営業調査等を伴う事業者（営業補償対象者）

表10-2

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
消費税等調査	事業者	—	技師 A	0.06	0.09	—	0.15人	
			技師 B	0.06	0.13	—	0.19人	

XI 土地評価

土地評価とは、取得等する土地（残地等に関する損失の補償を行う場合、当該残地を含む）の更地としての正常な取引価格の算定をする業務をいい、不動産の鑑定評価に関する法律（昭和38年法律第152号）第2条で定める「不動産の鑑定評価」は含まないものとする。

1 打合せ協議

中間打合せの回数は、3回を標準とし、必要に応じて打合せ回数を増減する。

2 現地踏査

現地踏査の費用内容及び取扱いは、II 建物等の調査 3 現地踏査 に準ずるものとし、これに要する直接人件費の積算は、表11-1により行うものとする。

表11-1

種目	単位	規模	職種	外業	備考
現地踏査	業務	—	主任技師 技師 A 技師 C	0.54人 0.54人 0.54人	

3 土地評価

土地評価は、次の区分によって行うものとする。

- (1) 地域区分及び標準地選定等業務
- (2) 標準地価格の算定業務
- (3) 各画地の評価格算定業務
- (4) 残地補償算定業務

4 地域区分及び標準地選定等業務

地域区分及び標準地選定等業務は、業務の対象となる地域の現地調査、用途的地域の区分検討、同一状況地域区分検討、取引事例地等検証、標準地選定条件決定等を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表11-2により行うものとする。

表11-2

種目	単位	規模	職種	外業	内業	計	備考
地域区分及び標準地選定等業務	業務	2～3 区分	主任技師	0.58	1.34	1.92人	
			技師 A	4.11	0.90	5.01人	
			技師 C	4.11	3.78	7.89人	
			技術員		0.28	0.28人	

注1 標準地の選定は、同一状況地域区分ごとに、1標準地の選定を行うものとしての歩掛である。

注2 本表規模欄に定める区分の数は、取引事例比較法における近隣地域の数をいい、本表記載の規模以外のものについては、表11-3の補正率表を適用するものとする。

表 11-3

近隣地域の数	1	2～3	4～5	6～7	8～10
補正率	0.80	1.00	1.40	1.80	2.30

5 標準地価格の算定業務

標準地価格の算定業務は、価格案の検討、鑑定評価との突合、公示価格規準、価格バランス検討等を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表 11-4 により行うものとする。

表 11-4

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
標準地価格の算定業務	標準地	—	主任技師	—	1.09	1.09 人	
			技師 A	—	1.91	1.91 人	
			技師 C	—	1.87	1.87 人	
			技 術 員	—	0.10	0.10 人	

注 複数の標準地を設定する場合の直接人件費の積算は、次式により行うものとする。

$$\text{標準地価格の算定に要する直接人件費} = \text{標準地数} \times \text{単価}$$

6 各画地の評価格算定業務

各画地評価格算定業務は、画地判定、個別的要因調査、比準算定等を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表 11-5 によるものとする。

表 11-5

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
各画地の評価格算定業務	100 画地	—	技師 A	2.30	11.33	13.63 人	
			技師 C	2.30	8.54	10.84 人	
			技 術 員	—	0.47	0.47 人	

注 各画地の評価格算定業務費は、1 業務当たりの画地数によって次式によるものとする。

$$\text{各画地の評価格算定に要する直接人件費} = \text{画地数} / 100 \times \text{単価}$$

7 残地補償算定業務

残地補償算定業務は、残地状況把握、比準表の適用、補償額の算定等を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表 11-6 により行うものとする。

表 11-6

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
残地補償算定業務	100 画地	—	技師 A	1.17	6.66	7.83 人	
			技師 C	1.17	4.08	5.25 人	
			技 術 員	—	0.25	0.25 人	

注 残地補償算定業務費は、残地補償対象数によって次式により行うものとする。

$$\text{残地補償算定に要する直接人件費} = \text{対象画地数} / 100 \times \text{単価}$$

8 評価格の調整業務

画地価額集計後起業者の実情により別途指示する調整方針検討を基に、価格調整を行う必要がある場合には、これに要する直接人件費の積算は、表 11-7 により行うものとする。

表 11-7

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
評価格の 調整業務	業 務	—	主任技師	—	0.12	0.12 人	
			技師 A	—	0.69	0.69 人	
			技師 C	—	0.88	0.88 人	
			技 術 員	—	0.03	0.03 人	

XII 地盤変動影響調査等

地盤変動影響調査等は、「公共事業に係る工事の施行に起因する地盤変動により生じた建物等の損害等に係る事務処理要領」（昭和61年4月1日付け建設省経整発第22号建設事務次官通知。以下「事務処理要領」という。）第1条の建物その他の工作物（以下「建物等」という。）について、同要領第2条第5号の建物等の配置及び現況の調査（以下「事前調査」という。）、第4条の調査（以下「事後調査」という。）並びに第7条に係る費用負担額の算定（以下「算定」という。）並びに費用負担の説明の区分により行うものとする。

[一] 事前調査、事後調査及び算定

1 打合せ協議

中間打合せの回数は、事前調査のみ、事後調査のみ及び算定のみ業務実施については1回を、事後調査に加えて算定も実施する場合は2回を標準とするが、必要に応じて打合せ回数を増減する。

2 現地踏査

現地踏査の費用内容及び取扱いは、II 建物等の調査 3 現地踏査に準ずるものとし、これに要する直接人件費の積算は、表12-1により行うものとする。

表12-1

種目	単位	規模	職種	外業	備考
現地踏査	業務	—	技師 A	0.44人	
			技師 B	0.44人	
			技師 C	0.44人	

3 事前調査及び事後調査を行う場合の建物の区分

事前調査及び事後調査を行う場合の建物の区分は、II 建物等の調査 4 表2-3、表2-4及び表2-10の区分によるものとする。

4 事前調査

(1) 建物等の調査

建物敷地内の建物等の事前調査に要する直接人件費の積算は、表12-2により行うものとする。ただし、鉄骨系、コンクリート系及び木質系のプレハブ造の建物については、木造建物に準じて処理するものとする。

なお、本歩掛に水準測量は含んでいないため、水準測量を実施する必要がある場合には、別途その費用を計上するものとする。

表 12-2

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
木造建物A	棟	70 m ² 以上 130 m ² 未満	技師 A	0.60	0.21	—	0.81 人	
			技師 B	0.60	0.17	—	0.77 人	
			技師 C	0.60	0.79	—	1.39 人	
			技 術 員	—	0.27	—	0.27 人	
木造建物B	棟	70 m ² 以上 130 m ² 未満	技師 A	0.72	0.22	—	0.94 人	
			技師 B	0.72	0.20	—	0.92 人	
			技師 C	0.72	0.88	—	1.60 人	
			技 術 員	—	0.27	—	0.27 人	
木造建物C	棟	70 m ² 以上 130 m ² 未満	技師 A	0.33	0.14	—	0.47 人	
			技師 B	0.33	0.17	—	0.50 人	
			技師 C	0.33	0.51	—	0.84 人	
			技 術 員	—	0.22	—	0.22 人	
木造特殊建物	棟	50 m ² 以上 70 m ² 未満	技師 A	0.29	0.12	—	0.41 人	
			技師 B	0.29	0.32	—	0.61 人	
			技師 C	0.29	0.55	—	0.84 人	
			技 術 員	—	0.35	—	0.35 人	
非木造建物 (用途区分) イ	棟	200 m ² 以上 400 m ² 未満	技師 A	0.89	0.23	—	1.12 人	
			技師 B	0.89	0.47	—	1.36 人	
			技師 C	0.89	1.21	—	2.10 人	
			技 術 員	—	0.35	—	0.35 人	
非木造建物 (用途区分) ロ	棟	200 m ² 以上 400 m ² 未満	技師 A	0.87	0.29	—	1.16 人	
			技師 B	0.87	0.52	—	1.39 人	
			技師 C	0.87	1.33	—	2.20 人	
			技 術 員	—	0.24	—	0.24 人	
非木造建物 (用途区分) ハ	棟	200 m ² 以上 400 m ² 未満	技師 A	0.45	0.19	—	0.64 人	
			技師 B	0.45	0.28	—	0.73 人	
			技師 C	0.45	0.85	—	1.30 人	
			技 術 員	—	0.24	—	0.24 人	

注1 本表規模欄に定める面積以外の場合で木造建物A、B及びCにあつては表12-3、木造特殊建物にあつては表12-4、非木造建物イ、ロ及びハにあつては表12-5の補正率表を適用するものとする。

注2 建物1棟が複数の区分所有者によって共同所有となっているときは、本表によらず表12-6により直接人件費の積算を行うものとする。この場合に共同持分を1戸として計上するものとする。

木造建物A、B及びCの補正率

表 12-3

建 物 延べ面積	70 m ² 未満	70 m ² 以上 130 m ² 未満	130 m ² 以上 200 m ² 未満	200 m ² 以上 300 m ² 未満
補正率	0. 8 0	1. 0 0	1. 3 0	1. 8 0

300 m ² 以上 450 m ² 未満	450 m ² 以上 600 m ² 未満	600 m ² 以上 1,000 m ² 未満	1,000 m ² 以上 2,000 m ² 未満
2. 4 0	3. 0 0	4. 0 0	5. 3 0

木造特殊建物の補正率

表 12-4

建 物 延べ面積	50 m ² 未満	50 m ² 以上 70 m ² 未満	70 m ² 以上 130 m ² 未満	130 m ² 以上 200 m ² 未満
補正率	0. 8 0	1. 0 0	1. 4 0	1. 9 0

200 m ² 以上 300 m ² 未満	300 m ² 以上 500 m ² 未満	500 m ² 以上 700 m ² 未満
2. 6 0	3. 5 0	4. 7 0

非木造建物イ、ロ及びハの補正率

表 12-5

建 物 延べ面積	200 m ² 未満	200 m ² 以上 400 m ² 未満	400 m ² 以上 600 m ² 未満	600 m ² 以上 1,000 m ² 未満
補正率	0. 8 0	1. 0 0	1. 4 0	1. 9 0

1,000 m ² 以上 1,500 m ² 未満	1,500 m ² 以上 2,000 m ² 未満	2,000 m ² 以上 3,000 m ² 未満	3,000 m ² 以上 4,000 m ² 未満
2. 6 0	3. 2 0	4. 1 0	5. 2 0

4,000 m ² 以上 5,000 m ² 未満	5,000 m ² 以上 7,000 m ² 未満	7,000 m ² 以上 10,000 m ² 未満	10,000 m ² 以上 15,000 m ² 未満
6. 2 0	7. 5 0	9. 5 0	1 2. 3 0

15,000 m ² 以上 21,000 m ² 未満
15.90

表 12-6

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
区分所有建物	戸	130 m ² 程度まで	技師 A	0.40	0.06	—	0.46 人	
			技師 B	0.40	0.25	—	0.65 人	
			技師 C	0.40	0.16	—	0.56 人	
			技 術 員	—	0.12	—	0.12 人	

(2) 工作物の調査

工作物の調査とは、駐車場（月ぎめ駐車場等）や店舗・工場等の大規模敷地内の一部の工作物のみの調査を行うものであり、工作物の事前調査に要する直接人件費の積算は、表 12-7 により行うものとし、本表規模欄に定める面積以外の場合は、表 12-8 の補正率表を適用するものとする。

表 12-7

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
工作物	箇所	100 m ² 以上 500 m ² 未満	技師 A	0.21	0.06	—	0.27 人	
			技師 B	0.21	—	—	0.21 人	
			技師 C	0.21	0.47	—	0.68 人	
			技 術 員	—	0.09	—	0.09 人	

注 建物調査の歩掛（表 12-2）を計上した箇所については、本歩掛を計上しないものとする。

表 12-8

敷地面積	100 m ² 未満	100 m ² 以上 500 m ² 未満	500 m ² 以上 1,000 m ² 未満	1,000 m ² 以上 2,000 m ² 未満
補正率	0.80	1.00	1.80	2.90

2,000 m ² 以上 3,000 m ² 未満	3,000 m ² 以上 5,000 m ² 未満
4.10	5.70

5 事後調査

(1) 建物等の調査

建物敷地内の建物等の事後調査（費用負担額の算定を除く。）に要する直接人件費の積算は、表12-9により行うものとする。

表12-9

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
木造建物A	棟	70 m ² 以上 130 m ² 未満	技師 A	0.53	0.23	—	0.76 人	
			技師 B	0.53	0.23	—	0.76 人	
			技師 C	0.53	0.43	—	0.96 人	
			技 術 員	—	0.24	—	0.24 人	
木造建物B	棟	70 m ² 以上 130 m ² 未満	技師 A	0.64	0.23	—	0.87 人	
			技師 B	0.64	0.23	—	0.87 人	
			技師 C	0.64	0.54	—	1.18 人	
			技 術 員	—	0.24	—	0.24 人	
木造建物C	棟	70 m ² 以上 130 m ² 未満	技師 A	0.25	0.25	—	0.50 人	
			技師 B	0.25	0.26	—	0.51 人	
			技師 C	0.25	0.14	—	0.39 人	
			技 術 員	—	0.27	—	0.27 人	
木造特殊建物	棟	50 m ² 以上 70 m ² 未満	技師 A	0.27	0.27	—	0.54 人	
			技師 B	0.27	0.28	—	0.55 人	
			技師 C	0.27	0.16	—	0.43 人	
			技 術 員	—	0.28	—	0.28 人	
非木造建物 (用途区分) イ	棟	200 m ² 以上 400 m ² 未満	技師 A	0.85	0.21	—	1.06 人	
			技師 B	0.85	0.36	—	1.21 人	
			技師 C	0.85	0.62	—	1.47 人	
			技 術 員	—	0.37	—	0.37 人	
非木造建物 (用途区分) ロ	棟	200 m ² 以上 400 m ² 未満	技師 A	0.80	0.27	—	1.07 人	
			技師 B	0.80	0.34	—	1.14 人	
			技師 C	0.80	0.54	—	1.34 人	
			技 術 員	—	0.51	—	0.51 人	
非木造建物 (用途区分) ハ	棟	200 m ² 以上 400 m ² 未満	技師 A	0.47	0.20	—	0.67 人	
			技師 B	0.47	0.26	—	0.73 人	
			技師 C	0.47	0.27	—	0.74 人	
			技 術 員	—	0.39	—	0.39 人	

注1 本表規模欄に定める面積以外の場合は、表12-3、表12-4及び表12-5の補正率表を適用するものとする。

注2 建物1棟が複数の区分所有者により共同所有となっているときは、本表によらず表12-10により直接人件費の積算を行うものとする。この場合に共同持分を1戸として計上するものとする。

表12-10

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
区分所有建物	戸	130 m ² 程度まで	技師 A	0.25	0.06	—	0.31人	
			技師 B	0.25	0.08	—	0.33人	
			技師 C	0.25	0.12	—	0.37人	
			技 術 員	—	0.08	—	0.08人	

(2) 工作物の調査

工作物の調査とは、駐車場（月ぎめ駐車場等）や店舗・工場等の大規模敷地内の一部の工作物のみの調査を行うものであり、工作物の事後調査（費用負担額の算定を除く。）に要する直接人件費の積算は表12-11によるものとし、本表規模欄に定める面積以外の場合は、表12-8の補正率表を適用するものとする。

表12-11

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
工作物	箇所	100 m ² 以上 500 m ² 未満	技師 A	0.21	0.12	—	0.33人	
			技師 B	0.21	—	—	0.21人	
			技師 C	0.21	0.24	—	0.45人	
			技 術 員	—	0.13	—	0.13人	

注 建物調査の歩掛（表12-9）を計上した箇所については、本歩掛を計上しないものとする。

6 算定

事務処理要領第6条（費用負担の要件）に定めるところにより算定が必要と認められる建物及び工作物について費用負担額の算定を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は表12-12により行うものとする。

なお、本歩掛は建物等の損傷箇所を補修する方法による費用負担額の算定の場合に適用するものとし、建物等の構造部の矯正による算定及び復元による算定の場合には、本歩掛を適用せず、別途見積等を徴収して対応するものとする。

表 12-12

区 分	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業		計	備 考
				調 査	図面等	算 定		
木造建物	棟	70 m ² 以上 130 m ² 未満	技師 A	—	0.23	0.15	0.38 人	
			技師 C	—	0.58	0.13	0.71 人	
			技 術 員	—	—	0.11	0.11 人	
非木造建物	棟	200 m ² 以上 400 m ² 未満	技師 A	—	0.39	0.26	0.65 人	
			技師 C	—	1.00	0.32	1.32 人	
			技 術 員	—	—	0.13	0.13 人	
区分所有建物	戸	130 m ² 程度まで	技師 A	—	0.04	0.06	0.10 人	
			技師 C	—	0.31	0.12	0.43 人	
			技 術 員	—	—	0.04	0.04 人	
工作物	箇所	100 m ² 以上 500 m ² 未満	技師 A	—	0.19	0.13	0.32 人	
			技師 C	—	0.39	0.08	0.47 人	
			技 術 員	—	—	0.08	0.08 人	

注 1 木造特殊建物は、木造建物として取り扱うものとする。

注 2 本表規模欄に定める面積以外の場合は、表 12-3、表 12-4、表 12-5 及び表 12-8 の補正率を適用するものとする。

〔二〕 費用負担の説明

費用負担の説明とは、公共事業に係る工事の施行に起因する地盤変動により生じた建物等の損害等に係る費用負担額の算定内容等（以下「費用負担の内容等」という。）の説明を行うことをいう。

なお、この場合の歩掛は、受注者が 2 名以上の編成で行うことを前提としたものである。

1 打合せ協議

中間打合せの回数は、2 回を標準とし、必要に応じて打合せ回数を増減する。

2 現地踏査

現地踏査の費用内容及び取扱いは、II 建物等の調査 3 現地踏査に準ずるものとし、これに要する直接人件費の積算は、表 12-13 により行うものとする。

表 12-13

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	備 考
現地踏査	業 務	—	技師 A	0.50 人	
			技師 B	0.50 人	
			技師 C	0.50 人	

3 概況ヒアリング等

概況ヒアリング等は、概況ヒアリング及び費用負担の説明の対象となる権利者等と面接し、費用負担の説明を行うことについての協力依頼を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表 12-14 により行うものとする。

表 12-14

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
概況ヒアリング等	権利者	—	主任技師	—	0.04	0.04 人	
			技師 A	0.06	0.04	0.10 人	
			技師 C	0.06	0.04	0.10 人	

注1 技師A 1名、技師C 1名の2名編成で行うことを前提としたものである。ただし、概況ヒアリングには、主任技師が加わるものとする。

注2 直接人件費 = 単価 × 権利者数

4 説明資料の作成等

説明資料の作成等は、権利者ごとの処理の方針の検討、費用負担の内容等の確認、説明資料の作成等を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表 12-15 により行うものとする。

表 12-15

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
説明資料の作成等	権利者	—	主任技師	—	0.04	0.04 人	
			技師 A	—	0.12	0.12 人	
			技師 C	—	0.24	0.24 人	

注 直接人件費 = 単価 × 権利者数

5 費用負担説明

費用負担説明は、費用負担の内容等の説明、記録簿の作成を行うものとし、これに要する直接人件費の積算は、表 12-16 により行うものとする。

表 12-16

種 目	単 位	規 模	職 種	外 業	内 業	計	備 考
費用負担説明	権利者	—	主任技師	—	0.08	0.08 人	
			技師 A	1.57	0.08	1.65 人	
			技師 C	1.57	0.46	2.03 人	

注 直接人件費 = 単価 × 権利者数

別表

設計数量表示単位一覧表

区分	種別	細別	単位	数値	備考
用地測量	作業計画		業務	1	
	打合せ協議		業務	1	
	現地踏査		業務	1	
	公図等の転写		m ²	100	数量が 1,000 m ² 未満の場合は 数値を 10 m ² とする。
	公図等転写連続図作成		m ²	100	
	地積測量図転写		m ²	100	
	土地の登記記録調査		m ²	100	
	建物の登記記録調査		戸	1	
	権利者確認調査（当初）		m ²	100	数量が 1,000 m ² 未満の場合は 数値を 10 m ² とする。
	権利者確認調査（追跡）		人	1	
	境界確認		m ²	100	数量が 1,000 m ² 未満の場合は 数値を 10 m ² とする。
	土地境界立会確認書作成		m ²	100	
	補助基準点の設置		m ²	100	
	境界測量		m ²	100	
	境界点間測量		m ²	100	
	用地現況測量（建物等）		m ²	100	
	用地境界仮杭設置		m ²	100	
	面積計算		m ²	100	
	用地実測図原図作成		m ²	100	
	用地平面図作成		m ²	100	
	土地調書作成		m ²	100	
	地積測量図等の作成		筆	1	
	不動産調査報告書の作成		筆	1	
	用地境界杭設置		本	1	
	復元測量		m ²	100	数量が 1,000 m ² 未満の場合は 数値を 10 m ² とする。
	公共用地管理者との打合せ		業務	1	
	現況実測平面図の作成		m ²	100	数量が 1,000 m ² 未満の場合は 数値を 10 m ² とする。
	横断面図作成		km	0.01	
依頼書作成		km	0.01		
協議書作成		km	0.01		

共通	打合せ協議		業務	1	中間打合せの回数は各区分ごとに記載の標準回数を参照のこと。
	作業計画の策定		業務	1	
建築物等の調査	打合せ協議	中間打合せ	回	1	
	現地踏査		業務	1	
	木造建物		棟	1	
	木造特殊建物		棟	1	
	非木造建物		棟	1	
	建物等の法令適合性の調査		棟	1	
	機械設備		事業所	1	
	機械設備	見積	台	1	
	生産設備		設備	1	
	生産設備	見積	台	1	
	附帯工作物		戸	1	
	附帯工作物	工場等の敷地	箇所	1	
	独立工作物		箇所	1	
	立竹木		m ²	100	数量が 1,000 m ² 未満の場合は数位を 10 m ² とする。
	庭園		箇所	1	
	墳墓等		m ²	1	
	建物等の残地移転要件の該当性の検討		権利者	1	
照応建物の設計案の作成等	建物計画案の策定		案	1	
	照応建物の設計案の作成		案	1	
権利調査	墓地管理者等調査		使用者	1	
	打合せ協議	中間打合せ	回	1	
	法令関係資料の調査		m ²	100	数量が 1,000 m ² 未満の場合は数位を 10 m ² とする。
	現況利用調査		m ²	100	
	聞き取り等調査 (自治体)		機関	1	
	登記履歴調査・住宅地区等調査		m ²	100	数量が 1,000 m ² 未満の場合は数位を 10 m ² とする。
	地形図等調査		m ²	100	
	聞き取り調査 (地元精通者等)		m ²	100	

	報告書作成		業 務	1	
営業その他の調査	打合せ協議	中間打合せ	回	1	
	現地踏査		業 務	1	
	営業		事業所	1	
	仮営業所設置	プレハブリース	事業所	1	
		賃貸物件	事業所	1	
	居住者		世 帯	1	
	動産	一般住宅、農家住宅	戸	1	
		店舗	店 舗	1	
		事務所、工場、倉庫	事業所	1	
	その他通損	仮住居、借家人	世 帯	1	
移転雑費		所有者 又は世帯	1		
予備調査	打合せ協議	中間打合せ	回	1	
	現地踏査		業 務	1	
	企業内容等の調査		事業所	1	
	敷地全体の配置		事業所	1	
	建物		棟	1	
	機械設備等		事業所	1	
	移転計画案の作成		事業所	1	
移転工法案の検討	打合せ協議	中間打合せ	回	1	
	関係資料収集		権利者	1	
	企業内容等の調査		事業所	1	
	敷地の使用実態の調査		権利者	1	
	駐車場等の使用実態追加調査		回	1	
	移転工法案の作成		権利者	1	
	照応建物の詳細設計	図面作成費	枚	1	
	機械設備		事業所	1	
	機械設備	見積	台	1	
	生産設備	見積	台	1	
再算定業務	打合せ協議	中間打合せ	回	1	
	現地踏査		権利者	1	
	営業（再調査・再算定）		事業所	1	
	仮営業所設置（再調査・	プレハブリース	事業所	1	

	再算定)	賃貸物件	事業所	1	
補償説明	打合せ協議	中間打合せ	回	1	
	現地踏査		業務	1	
	概況ヒアリング等	補償説明等A	権利者	1	
		補償説明等B	権利者	1	
	説明資料等の作成	補償説明等A	権利者	1	
		補償説明等B	権利者	1	
	補償説明	補償説明等A	権利者	1	
		補償説明等B	権利者	1	
事業認定申請書図書 の作成	打合せ協議	中間打合せ	回	1	
	現地踏査		業務	1	
	現地調査等		業務	1	
	資料の収集及び作成		業務	1	
	調書等の作成		業務	1	
	添付図面作成		種類	1	
裁決申請図書 の作成	打合せ協議	中間打合せ	回	1	
	現地踏査	物件有	件	1	
		物件無	件	1	
	資料の整理・検討		件	1	
	裁決申請書(案)の作成		件	1	
	図面の作成	起業地表示図等	件	1	
		土地調書添付図面	筆	1	
その他参考図書の作成		件	1		
明渡裁決申立図書 の作成	打合せ協議	中間打合せ	回	1	
	現地踏査	物件有	件	1	
		物件無	件	1	
	資料の整理・検討		件	1	
	明渡裁決申立書(案) の作成	物件有	件	1	
		物件無	件	1	
	図面の作成		件	1	
その他参考図書の作成		件	1		
調査 消費税等	打合せ協議	中間打合せ	回	1	
	消費税等調査	営業調査有	事業者	1	

		営業調査無	事業者	1	
土地評価	打合せ協議	中間打合せ	回	1	
	現地踏査		業務	1	
	地域区分及び標準地選定等		業務	1	
	標準地価格の算定		標準地	1	
	各画地の評価格算定		1画地	1	
	残地補償算定		1画地	1	
	評価格の調整		業務	1	
事前調査、事後調査及び算定	打合せ協議	中間打合せ	回	1	
	現地調査		業務	1	
	事前調査	木造建物・木造特殊建物・非木造建物	棟	1	
		区分所有建物	戸	1	
		工作物	箇所	1	
	事後調査	木造建物・木造特殊建物・非木造建物	棟	1	
		区分所有建物	戸	1	
		工作物	箇所	1	
	算定	木造建物・非木造建物	棟	1	
		区分所有建物	戸	1	
		工作物	箇所	1	
	費用負担説明	打合せ協議	中間打合せ	回	1
現地踏査			業務	1	
概況ヒアリング等			権利者	1	
説明資料等の作成等			権利者	1	
費用負担説明			権利者	1	